



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	アリストテレス哲学における方法論：ロギケー(形式言論構築術)の展開
Author(s)	千葉, 恵
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 104, 1-93
Issue Date	2001-06-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33998
Type	departmental bulletin paper
File Information	104_PL1-93.pdf



アリストテレス哲学における方法論

ロギケー（形式言論構築術）の展開

千 葉 恵

「新二元論を採る哲学者たちが、自身の形而上学的直観がデカルト的だと思うのはよいとして、……たいていの場合、彼らは経験科学に先立ち経験科学によっては触れ得ない世界の認識方法という考えをもてあましている」。R. Rorty⁽¹⁾

1 はじめに

われわれは数々の歴史的偶然の積み重ねの末、幸運にも Bekker 版にして 1462 頁の Corpus Aristotelicum を手にしている。アカデメイアに入門したばかりのアリストテレスは当然のことながら空手で世界に対峙していた。後に「万学の祖」と呼ばれる彼はどのような思考様式を持っていたが故に、これほどの作品を残しえたのであろうか。何がアリストテレスをしてアリストテレスたらしめたのであろうか。これは分析的資質を兼ね備えた彼が自然や行為、存在そして神であれ探究対象に取り組むさい、その世界を分節する方法がいかなるものであったかを検討することに他ならない。彼は学問の区別は対象の相違に基づくとするが、対象の相違はそれへのアプローチへの相違をもたらす。それが彼の哲学体系を理解しようとする者はその方法論を理解しなければならない由縁である。本稿においては、彼の方法論一般の理解を深めたい。そして、その試みのなかで、自然学から第一哲学（形而上学）へ、弁証術から第一哲学への道筋に関しては、まだ論ずべき余地が多々あることを鑑み、形而上学の可能性をその方法論の展開という視点から考察する。「ロ

ギコース（形式言論構築術上）」という手法が、単に弁証術構築の手法に留まらず、探究対象の存在主張をなす規範的な言論構成員を持ったものであることを明らかにしたい。なお、この手法と「ピュシコース（自然学上）」という手法は、「アナリュティコース（分析論上）」という手法とともに、相補的なものであること、さらに、これら三つの方法の相補性に基づき、言論による形而上学的認識に向かいうるものであることを明らかにしたい。

2 探究姿勢と理論学の区分

彼の基礎的な思索の様式は、ちょうど弓射るひとが「的を定める」ことによって、正しいものを射当てることができるように、第一に探究対象を定め、そして「事物の本性が認める限りにおいて」その本性に即して、探究することであると言えよう。(1094 a23f, b23-25) その探究の方法は「適切に(καλῶς) アポリアを提示すること」である。(995 a28) あらゆる学問的な営みの基礎にある思索の方法は『形而上学』B巻「難問集」の冒頭で、足枷の比喻により印象深く描かれている。

困難を乗り越えようと欲する者にとっては適切にアポリアを提示することが有益である。というのも、後の乗り越えは先に立てられたアポリアの解であり、足枷を知らない者にそれを解くことはできないからである。思考におけるアポリアはものにおける足枷を表わしている。つまり、ひとはアポリアに陥っている限り、その点で足枷を架けられている者と平行状態にある。どちらの場合にも先へ進むことはかなわない。(995a27-33)

思索における進展は、まず問いつまり行き詰まりを明晰に適切に立てることによってしか望めない。もし問いが明晰でなければ、それに対する解も明晰なものとなることはありえず、たとえ解に出会っても、それがその問いの解であることを知りえないからである。行き詰まりを明晰に行き詰まりとして表現できるならば、その乗り越えはもう近くにあるであろう。心理的には、何であれ break through の直前に、息苦しくなるのは壁が壁としてはっきり面前に迫ってくるからであり、ひとはその息苦しきの故にその乗り越えを試みざるをえないからである。アポリアを適切に提示することが、アリストテ

レスのあらゆる思索における基本的な探究態度であり、後述される「教養」を形成すると言える。

この基本的態度のもとに、アリストテレスは複層的な世界をそれぞれ固有の領域そして固有の接近視角により分節し探究する。彼は当時、研究対象に即した探究の方法が確立されていないことを不満に感じている。或るひとはあらゆる議論が数学的に厳密に語られることを望み、他のひとは議論の正しさの証拠に常に詩人の言葉が引用されることを望む。(995a6ff)そのような事情のなかで、彼は「われわれはまず、それぞれの対象をいかに受け取るべきかについて教養を身につけなければならない。というのも、知識を求めながら、同時に知識に至る方法を求めることは不条理なことだから」と述べている。(995a 12-14, cf. 402a10-21) アリストテレスは「それぞれの対象をいかに受け取るべきか」という問いのもとに、対象に即した知識獲得の方法の確立を自らの課題としている。この問いのもとに彼は理論学、実践学、制作学を分節するが、言ってみれば世界が持つ豊かさに応じて、学問区分が成立する。そして受け取る様式がそれぞれの学の方法論となる。これらの三つは、端的に言えば、知る、為すそして作るという様式において区別されるであろう。彼は「理論学のゴールは真理であり、実践学のそれは行為である」と言う。(993b 20f) さらに、理論学の一つである自然学と制作学について「作品が制作学のゴールであるが、感覚に即した現象が常にまさに自然学のゴールである」と言われる。(306a16f)

理論学には「数学」と「自然学」と「神学」が属するとされる。(1026a19)「最も厳密な諸学」(306a27)と呼ばれている数学的諸学に対する自然学の関係については当時さまざまなアポリアが見いだされていた。⁽²⁾ ピュタゴラス派のティマイオスおよびプラトンは数学と自然学の成立次元を混同し、例えば元素を三角形から構成されるという仕方で、物体は物体ではない面から構成されることによって、すべての物体が生成すると主張した。(Timaeus, 53c, De Caelo, 298b33ff, 306a23ff) しかし、「この仕方で物体はすべて面から成ると語っているひとびとには、明らかに、数学とは相容れないことを言うはめになる」。(299a2-5) 立体が面から、面が線から、線が点から成るという考

えも同様であり、もしそうであるなら、線の部分は線である必要はなくなる。しかし、「線が連続的であり、点が不可分割なものであるからには、連続的なものが不可分割的なもの、例えば線が点からなることは不可能である」。(231a24f, cf. *Phys.* Z1-2) プラトンが主張するように、点のかわりに「不可分な線」を説くと、自然的な物体について不可能なことが帰結する。(cf. 992a10ff)

というのも、数学的なものについて起こる不可能なことは、自然学的なものにも伴うが、しかし、自然学的なものにとって不可能なことは、必ずしもそのすべてが数学的なものにも当てはまるというわけではないからである。というのは、数学的なものは抽象によって語られるが、自然学的なものは付加によって語られるからである。かくして、不可分割的なものについてはありえないが、しかし、自然学的なものについては必然的であるようなものが多い。というのも分割可能なものは不可分割的なもののうちに存在しえないが、しかし[自然物の]諸様態はすべて二つの仕方でも分割だからである。(299a13-20)

数学的に表現されえないものは、自然学的に表現されることはありえない。つまり数学は自然学の必要条件を構成している。数学が行う「抽象」とは自然的な物体から、熱冷、運動等を捨象し、大きさについてのみ考察することであり、自然学が行う「付加」とはその大きさに軽重、熱冷、運動等を付加して考察することである。(cf. *Met.*, 1061a 28ff, *An. Post.* A27) 端的に言えば自然学的知識の対象はいつも主に「感覚に即した現象である」(306a16f)のに対し、数学の対象は感覚に即した現象ではないということである。抽象の次元で語りえないことは感覚の次元においても語りえないが、その反対は必ずしも真ではないということもできよう。

他方、自然原論とも言うべき『自然学』や『動物部分論』等生物学的著作において展開される自然学と第一哲学と呼ばれる神学の関係についても、それは今日的には科学と形而上学の関係と表現できるものであるが、アボリアを抱えている。

アリストテレスは『自然学』と『形而上学』双方において展開される質料形相論により自然を理解する。もし「すべての自然物」が質料と形相の結合体であるなら、その「何であるか」の説明言表は運動を含まねばならず、形

相は運動の根拠となる質料から「説明言表に即して離存的なもの」となる。(1042a29, 1025b34ff, 193b4f) そこでは形相は「説明言表に即した実体」と呼ばれる。(eg. 1025b28f, 1037a17) もしすべての自然物がこのような結合的な存在であるならば、「自然学が第一の学」(1026a28f, cf. 1037a13-17) となり「自然物においていかに「何であるか」を探究しそして定義すべきかは明らか」となるであろう。(1026a4f) その方法とは結合体の感覚的諸部分である質料に秩序と統一性をもたらし形相を、質料の根拠として説明する論証または定義の形成を試みることである。これは基本的に『分析論後書』において、いかにして科学的知識は可能かという課題のもとに展開される、因果構造を前提にした論証理論がその方法論の範型となる。基本的には、論証の形成を通じて定義が与えられ、自然物の何であるかが知られる。

しかし、世界はより豊かであり、アリストテレスは永遠で、不動さらに離存的な存在者の可能性を考慮にいれ、運動を対象とする自然学とは異なる一つの理論学の可能性に言及している。(1026a10-12, cf. 184b25ff) 『形而上学』の「最も困難で、しかも最も検討されるべきアポリア」(999a24f) は、はたして個々の事物よりほかに何も存在しないのかということである。「[形相と質料の] 結合体より他に或る何ものかがとりわけ存在しているとすれば、どうであろうか」。(999a32f) この問いに付随して、その存在様式はどのようなものか、感性的知覚の対象以外の認識の様式はいかなるものかが問われる。(999a24ff) 『形而上学』において、存在の普遍学の構想は存在の根拠としての実体論となるが、これは結合体が属する生成次元の背後にあって、感性的知覚の及びえない原理次元の存在様式の探究となる。そしてそれは質料形相論や可能態現実態論という仕方でも展開され、そしてその延長線上で純粋形相である神が、究極の課題となる。もし、この不動でかつ離存的なものが存在しなければ、自然学が第一の学になろうが、この存在者を対象とする学が存在するなら、それは「神学」と呼ばれよう。(1026a19)

アリストテレスは第一哲学について「神学」という名称を用いる時、「ひとはたして第一哲学は普遍的なものであるのか、それとも或る類即ち或る一つの実在についてのものであるのかを問うであろう」と自ら語り、このアポ

リアが生起する可能性を自覚している。(1026a23-25, cf. 1064b6f) これが所謂神学—存在論アポリアである。第一の哲学は神学という特殊形而上学 (metaphysica specialis) なのか, それとも存在としての存在を普遍的に研究する存在論と呼ばれる一般形而上学 (metaphysica generalis) なのかという問題である。⁽³⁾

これは「存在を存在として, さらにそれに自体的に属するものどもを研究する或る学がある」(1003a21f) とする Γ 巻と「神学」を主張する E 巻という『形而上学』の二つの巻の相違として提示することもできようが, アリストテレス自身は存在の派生的, 帰一的構造の解明を通じて, 普遍学と個別学のあいだの緊張を解消できると考えている。彼は「もし何か或る不動な実体が存在するならば, これを対象とする学の方が一層先であり, 第一の哲学であり, そして第一であるという仕方では普遍的なものであろう。そして存在である限りの存在について研究すること, そして存在である限りにおける「何であるか」とその諸属性を研究することはこの学に属するであろう」と述べている。(1026a29-32) ここで「第一であるという仕方では普遍的なもの」という表現は存在の第一の根拠が把握されれば, 領域上あらゆる存在者の理解も可能になるであろうということである。

このように, 存在論は「存在としての存在の第一の諸根拠」(1003a31) の探究に方向づけられている。ちょうど健康的と呼ばれるものすべてに一つの学が成立するように, 多くの仕方では語られる存在もそのようなものであり, 一つの学に属する。存在としての存在の研究が何であれ「ある」と言われるものども一般についての研究を意味するとすれば, それは領域上あらゆる存在者を対象とするであろう。しかし, それは単に一つのものについて語られるものどもを研究する一つの学があるというのではなく, 「一つの実在との関係において語られるものども」について一つの学が成立する, そのような仕方では一つの学の対象となる。存在論は帰一的な仕方では成立する学問とみなされている。(1003b12-14) 彼は「学問はあらゆるところでとりわけ第一のものについて, つまりそれは他のものどもがそこから把握され, それ故に語られるところの第一のものであるが, その第一のものについてある。かくして,

もし実体がそれであるなら、哲学者は諸実体の諸原理と根拠をとらえなければならぬであろう」と述べる。(1003b16-19)

諸実体の根拠はそれ自身実体であるために、存在の帰一的な構造は様々な次元で語りうるので、形相と質料さらには現実態と可能態等形而上学的原理を「類比において総観する」(1048a37) 方法の訓練もこの学には不可欠となる。原理次元で感性的知覚の対象たりえない、質料と形相そしてその関係、可能態と現実態そしてその関係は「普遍的にそして類比的に語る」(1070a32) そのような抽象的思考、形式言論上の思考による、独自の方法論の展開が不可欠となる。⁽⁴⁾そして、最も探究困難な神の存在を知ることができるなら、形相や現実態における存在様式についても判明な知識を持つことができるであろう。ことに、それ自身は不動で完全に自足し最高善であり、自らの思惟のうちに現実態においてあり、他に一切関与することのない神の存在を解明しうるなら、「一切のものの自然」(1075a11)のもとにある自然界全体を「愛されるものが動かすような仕方でも動かし」(1072b3)、その秩序正しい目的論的存在構造を究極的に根拠づけていることを明らかにすることができるであろう。(eg. 1072a28, 1072b7, b13f, b19f, b29, 252a12)⁽⁵⁾従って、普遍的な存在論も現実態においてある純粋な形相としての存在者の理解を待って完結するという意味で、神学に収斂すると言えるであろう。

3 教養：Generalist と Specialist

アリストテレスの方法論を理解する一つの手掛かりになるのが「教養(παιδεία) (cf. humanitas)」という概念である。教養あるひとと無教養なひととの差異は考察の対象に即して、その探究にふさわしい方法を身につけているか否かにおいて明らかとなる。「事物の本性が認める限りにおいて、各々の類に即してそれだけの精確さを追及することは教養あるひとのなすことである」。(1094b23-25) 今日においても、T.P.O をわきまえ、適切な仕方でも適切なことを論ずることができるひとにわれわれは教養を見出す。この適切な仕方というのがアリストテレスの方法論構築の基礎にあり、それは先に見

たように、「適切にアポリアを提示する」そのような能力に属するものである。教養とは一つの知的な熟練であると言える。

彼は『動物部分論』の冒頭で次のように述べている。

あらゆる理論的考察と方法に関して、地味なものも高貴なものも同様に、熟練(ἐξέρ)には二種類あるように思われる。その一つは事物の知識と呼ぶことがふさわしいものであり、他は、何か教養のようなものと呼ぶことがふさわしいものである。というのも、教養あるひとなら、話し手が何を適切に語り、或るいは適切でなく語っているかについて滞りなく的を得た判断をすることができるからである。実際、そのようなひとをわれわれは「全般にわたり教養あるひと」とであるとする。(639a1-7)

全般にわたり教養のあるひとは、「真なるものがいかにあるかとは独立に」(639a 14)、つまり立てられた言明の真偽とは独立に、いかなる問題であれ、それがうまく語られているか否かを適切に判断する形式言論の次元で方法を持っているひとのことである。他方、専門的な知識を持つ専門家は限定されたいし具体的な仕方でそのような方法を持つ教養あるひとのことである。他の箇所でも、「すべてのものに関して端的に教養あるひと」と「個々のものについて教養あるひと」という仕方で二種類の教養が挙げられている。(1094b29-1095a2) これら二つの教養に共通するものは広い意味での知的な熟練ということになる。そしてこれらは相互に補完的な機能を持つと言える。というのも、一つの領域で堅固な言語網を構築できるなら、新しい対象についても、自らが持つ言語網により何らかの共通項を摘出し、少なくとも議論の組み立て等理解可能となるであろうからであり、他方、全般にわたり言論の適切性を判断できるひとその熟練は個別的な対象の理解にも機能するであろうからである。⁽⁶⁾

これは今日の表現を借りれば、generalist と specialist という仕方では区別されうるであろう。両者とも世界についての何らかの言明の批判的判定者としての能力を持つという点で同じ教養ある者である。生物学であれ、靈魂論であれ個別科学について知識を持つ specialist はそれぞれ固有の存在領域に関して適切な方法と判断力を持つ。それに対して、generalist とは世界の存在様式に対する言及を一旦留保して、言論一般に対し、形式的次元で言明の適切性を吟味できる方法や基準を身につけたひとのことである。アリストテレ

スは specialist を作る方法論を主に論証理論として展開し、他方、generalist が身につけるべき教養を作る方法を主に弁証術として展開する。

論証理論は或る特定の類の原理に基づき、或る視座からの世界の存在様式の解明として因果構造に関与し、科学的知識の成立条件を明らかにするが、アリストテレスは論証理論に三つの課題を担わせている。一つはその理論的側面として、実際に現場の科学者がそれに従っているかどうかは括弧に入れたうえで、科学的知識が成立する理想的な条件は何であるかを問い、個別諸科学の形式として幾何学を範型とした公理論的演繹体系を構築している。他は実践的ないし探究論的側面であり、科学者が例えば、月蝕や雷等探究の現場における発見を科学的知識とする規範として、論証理論が構築される。第三は実用的つまりプラグマティックな側面であり、科学的知識の教授と学習の方法として論証理論が展開される。論証理論は説明の理論であり、探究過程を通じて、事物の因果論上基礎的な特徴が他の派生的な特徴を必然的なものとして説明し、科学的知識をもたらす理論である。従って、論証理論は根拠および必然性の問題に明確な見解を提供しうるものでなければならない。このように事物、事象を論証の条件にかなう形で根拠づけて説明する手法、或るいはより厳密には、事物が一なるものであることを、その事物を構成する様々な属性を統一する因果上、説明上基礎的な特徴から説明する手法を D. Charles にならい「説明論的アプローチ」ないし「分析論モデル」と呼ぼう。⁽⁷⁾ 現場の科学者はこの説明論的アプローチを身につけたうえで、各々の領域において知識を求め探究する時、specialist として教養ある者となりうるであろう。

個別諸科学が探究することのできない、例えば矛盾律のような存在の諸公理や諸原理について、科学者たちが、その公理の「真理について、いかなる仕方でも受容しなければならないか」について論じるとすれば、それは『『分析論』における無教養』の故であるとされる。(1005b2-5, cf. 1006a6) 個別諸科学が、その固有な第一原理を証明することはできずに、真なるものとして容認仮定せざるをえないことを『分析論』における教養あるひとは知っているからである。あらゆることに論拠があるわけではなく、存在の原理と言える

矛盾律の真理性は論証されずに、ただ論駁的につまり、それを否定するものも矛盾律に則り論じざるをえないことを示してやればよい。存在としての存在の第一の諸根拠を探究することは、個別科学者の課題ではない。

これに対し、*generalist* としての教養を身につけることは、弁証術の熟練によると言えよう。『トピカ』において展開される弁証術は、説得を事とする弁論術や妥当な推論を事とする論理学等周辺の言語使用の形式的構造をめぐる諸術を一部包摂しながらも、独自の課題を担っている。アリストテレスは『トピカ』の冒頭で「この研究の目的は、提出されたすべての問題について、われわれがそれにより共有見解 (*ἐνδοξα*) に基づき推論することができ、そしてそれによりわれわれ自身が論拠を与え、反対なことを語らずにすむ方法を発見することである」と述べている。(100a18-21) この一文から、この研究は提出されるあらゆる種類の問題に関わり、そして共有見解から推論や論拠を形成し、相手の反論を封じ、同意を取り付けるそのような方法を確立することであることが伺われる。あらゆる問題に関する以上、対立する主張についてもそれぞれを共有見解から推論し同意を取り付けるそのような双方の主張を確立する試みがなされることになる。換言すれば、問い手と答え手のあいだの問答において、定立命題の確立と覆えしをめぐるトポス（論点）を提示することにより、問答が適切になされているかを形式のレベルで吟味する方法を提示することである。(172a35f)

弁証術の大きな特徴は共有見解のもとに議論を展開することにある。「共有見解 (*ἐνδοξα*)」とは「すべての人または大多数の人ないし学者たちにそうであると思われている事柄」である。(100b21f) 共有見解はこのような人々に広く受け入れられたものであり、現用言語として思考の規範性を提供する。例えば「類似なもののものの一つのものについて、或る時そうあるその仕方、残りのもののものについてもあるということは共有見解である」とされる。(108b13f) 類似なものという一つの類に属するものの一例が或る特徴を備えていれば、他のものもそうであるという、類似や同そして異など一般的な概念の次元でもたれる見解は容易に共有される。アリストテレスは自らの思考を共有見解の上に構築していくことをヴァランスの取れたそして信頼に値す

る探究過程として積極的に取り入れている。⁽⁸⁾

ただし、共有見解が探究論および意味論との関連において、さらにはアリストテレスの哲学的体系においてどのような位置づけを持っているかはただちには明らかではない。『トピカ』では共有見解がどのような過程を経て形成されるかについては一切触れられず、そういうものがあると前提されている。知識にいたるまでの認識論上の発生論的視点から言えば、これは心的過程のどの段階に位置するのであろうか。彼の認識論においては、まず感覚が生じ、そこから記憶が形成され、経験となり、それに基づき技術や知識が心に形成される。(An. Post., B16, Met, A1) 個人のこのような心的過程の集合的な集積として共有見解が形成されるのであろう。一つはっきりしていることは、後に見るように、共有見解は知識とは異なりドクサ（意見、見解）の次元のことであるとされていることである。従って、一つの心的状態である知識にいたる発生論的な視点から共有見解を捕えようとする試みは適切ではないのであろう。これは、むしろ、論証理論の実践的側面である探究論的視点から論じられるべきであろう。

『分析論後書』B10において、探究過程のなかにどれだけの定義が組み込まれるかが論じられている。探究はまず探究対象の名前が何を意味するかの説明言表を獲得することから始まる。その説明言表は「或る種の定義」と呼ばれるものである。(93b29) 続いて、論証の形成を通じてその存在を把握し、最後にその把握により何であるかの定義を形成しうる程度にまで高められた無中項の前提からなる論証を通じて、実質的には何であるかと同一である何故にあるかの把握に到達する。探究の第一段階が語や名前の意味の理解であるが、アリストテレスの意味論は『命題論』冒頭に明らかなように実在論的なものでありながら、つまり語の意味は世界の存在様式から与えられるものでありながら、D. Charles が説得的に論じているように、その意味を理解することのうちに、名前の指示対象が存在することさらには本質が存在することは指示上の意図として仮定されることのない、意味論上浅い立場にある。⁽⁹⁾ 私は共有見解は、世界の存在様式についての、言語共同体がもっている安定した言語網のことであると解する。そこでは共同体の信念や見解は世界の存

在様式についてのものではあるが、そこで形成されている安定した言語網の構成要素の意味の理解には、存在についての信念や見解は要求されてはいない。言語網の要素である各々の語句はその説明言表を形成する諸要素と身近に連関し、それら類や種差と呼ばれるものを介し他の近接語句とも連関するが、一つの意味単位として他の語句との差異において、その意味は知られる。語の意味がそこにおいて安定している言語網は、このようにその理解において対象の存在を要求しない意味論上浅いものであるが、共有見解として探究の端緒を与え、そこから対象の存在そして根拠への探究が進められる。

実際、アリストテレスは『ニコマコス倫理学』において探究の端緒として、さらには探究の終局においても保持されるものとして共有見解をとらえている。彼は外界の刺激を受動することに伴う快楽と苦痛をめぐる対応の仕方でも四つに分類される人柄の知識を得ようとする文脈において、次のように述べている。

他のものどもについてと同じように、諸現象 (*τὰ φαινόμενα*) を提示しそして最初にアポリアを究明しつくすことから始め、そして[心の]これらの受動態について、できれば、すべての共有見解を証明しなければならないが、さもなければほとんどの重要なものを証明しなければならない。というのも、諸困難が解決されそして共有見解が残されるなら、十分に証明されたことになるからである。(1145b2-7)

ここで「諸現象」について、それが「観察された事実」を指すのかそれとも「共有見解」を指すのかの解釈が争われている。G. Owen が指摘するように、続く箇所 (1145b8-20) で提示されているのは、最初に「……と思われる」(b8) で始め、最後に「これらが語られていることども (*τὰ λεγόμενα*) である」(b20) と述べられており、観察された事実というよりは、人柄についてひとびとにそう思われている共有見解が提示されていると理解すべきである。⁽¹⁰⁾ 引用文においても「共有見解が残される」とあるように、探究の端緒として共有見解が用いられることが理解されよう。そして、探究の端緒において用いられる共有見解はそのものとしては真偽にコミットさせられておらず、語の意味の説明言表に対する共同体の理解や見解のことである。なお、証明の対象になるのは、すべて「さもなければほとんど」の共有見解であり、

探究の終局において若干の共有見解が偽なるものとして否定される可能性を留保している。そこで残された共有見解は再び世界の存在様式についての信念であろう。そしてこれは共同体の現用言語として新たに規範的な力を持つものであると言える。

4 方法としての弁証術と弁証家の実践

アリストテレスは、人間の営みのほとんどが関与する言葉の使用をめぐる弁証術の適用可能な領域を、「この研究 (*ἡ πραγματεία*) がどれほどまた何に役立つか」という問いのもとに提示する。(101a25f) ここで「この研究」とは言葉の営みである議論の方法論とそこでの実践双方を含む弁証術という一つの技術を意味している。「どれほど」役立つかというその射程に関して言えば、議論される限りのものは何であれ弁証術に関わることができるかときあたり答えることができよう。(172a12) さらに、「何に」対してかと言えば、弁証術の構築とその実践は言葉のやりとりの「訓練」そして「対話」さらには「哲学に即した諸学問」に対して「役に立つ」とされる。(101a26-28) 議論の訓練や対話に有用であるのは「方法を持っていれば、容易に提出された問題について議論でき」また共有見解に基づき「われわれに適切に語っているとは思えない考えを変えさせる」ことができるからである。(101a27ff, 164a12ff)

他方、哲学に則した諸学問のうちには自然学や倫理学等が含まれるが、これらに対して有用であるのは、提出された問題の「両面に対しアポリアを提示することができるなら、各々においてわれわれは真と偽を容易に見て取るであろう」からである。(101a26ff, 162a15f, 155b10ff, cf. 1005b1) 双方の見解に共有見解から証明を企てることは、同時に双方にアポリアを提示することであり、私はこれが弁証術の実践の中核であると解する。そしてこのドクサ（意見、見解）次元におけるプロとコントラの議論を形成するという企てが、知識の次元における存在言明の真偽の確定に貢献する。

さらに、この貢献の延長線上において、弁証術は他の諸技術や学問との対

比において特有な機能を持つとされている。

なお、これはそれぞれの学問の第一のものどもに対して役に立つ。というのも、あらゆるものどもの諸原理は第一のものであるので、手にしている学問に即してその固有の諸原理からそれら原理自身について何かを語ることはできず、それぞれについて共有見解を通じて諸原理について分け入ること必然だからである。だが、これは弁証術の固有のないし最も適任の事柄である。というのも、弁証術は批判的であることによって、あらゆる探究の原理に対して道を備えるものだからである。(101a36-b3)

個別科学は自らの実践をその上に構築している原理の真理性、例えば運動があるとか大きさがあるということに異議をさしはさむひとに対して、他の諸命題をその原理のもとに論証するようには、その原理を論証することはできない。個別科学者はその原理の真理性を容認仮定している。それに対して、弁証術は任意の命題に対し共有見解に基づき問いの形式で提示し、同意をとりつける営みであった。先の矛盾律の論駁的証明に見たように、運動がないとか、大きさがないとか主張するひとに対して、その主張そのものが一つの声帯の運動であり、大きさをもったものから発話がなされていることを論駁的に示してやればよい。これらは「自然学者よりも上位にあるひと」である哲学者が弁証術的に証明する事柄である。(1005a34) これは弁証術がその固有の機能を発揮しうる一つの局面である。批判的に吟味する弁証術を用いてなしうることであり、共有見解つまり現用言語の規範性に則り、あらゆる学問的探究の原理の確立に向かう仕事が挙げられている。

この弁証術の射程の論述から弁証術の二つの方向性を主張する動きがある。ひとつは真偽にかかわりなく知的訓練としての実践であり、他は第一哲学に向かう実践である。T. Irwin は『第一原理』において、その著を導く主要な問いとして「どのように弁証術が共有見解を超えて客観的な諸原理に導きえるか」を提示している。その問いのもとに彼は知的訓練を「純粹弁証術」と呼び、第一原理に導く後者を「強い弁証術」と呼ぶ。⁽¹¹⁾ しかし、これは誤解を招く区別である。弁証術が哲学に役立つという考えは弁証術の実践には哲学的実践と同一の部分があると言うのではなく、一つの技術を他の上位の学が利用し、自らの学を展開させると解するべきであろう。弁証術はその限りにおいて哲学に有用なのである。E. Berti が「弁証術の公的使用」から「弁

「弁証術の科学的使用」を区別するのは、Irwin の区別より改善されたものであるが、誰がその使用者であるのかに関してはなんら考慮が払われていない。⁽¹²⁾ 弁証家による弁証術の使用と哲学者による使用は、すぐ後に見るように「能力の方向」(1004b24)において異なるものであり、弁証術をその役割において区別するよりも、使用者を明確に区別しなければならない。先に見た『トピカ』A2 における有用性の理由はいずれもプロとコントラの議論を提示し、批判的に吟味する弁証術それ自身が持つ機能がさまざまな言論の構築の場で利用されるというものであり、弁証術それ自身の仕事ははっきりしている。(101a29f, a33, a34-36, 101b3)⁽¹³⁾ 弁証術はどのような利用のされ方をしようとも、またどのような貢献をなしえようとも、その本来的な機能は議論を吟味検証することにある。

弁証術は、共有見解に基づき議論の方法そして規則を形成し、命題の批判吟味に徹する点において、独自の存在理由を持った自律的な術である。弁証術の実践が論証科学や哲学に対して、そしてそれ故に自然本性が持つ因果的構造において成立する必然的知識に対して、基本的には真理の観点に対するドクサ（意見、見解）の観点という仕方に対比されていることは、双方の次元の相違を際立たせている。(105b30f, cf. 72a7ff, 100a27ff, 162a15f, 162b31-33, 183b3) 論証理論において類の原理にかかわる「仮説」と呼ばれるものは、「矛盾対立のうちのどちらか一方を摂取容認する」(72a19f)が、それに対し矛盾の弁証術的推論は矛盾する命題の「任意の」一方に対し共有見解に基づき推論を提出するものでなければならない。(72a10, cf. 172a11-18) このように弁証術的に論じるということはプロとコントラの議論をそれ自体のために提供することであり、事物の本性の知識獲得に向かわないそのような技術である。つまり、『トピカ』において真偽の探究を括弧にいれてプロとコントラの議論を作るトレーニングマニュアルとして弁証術の方法が構築され、そのもとに対立見解の提示の実践がなされている。

彼は『形而上学』において弁証術と哲学の関係について次のように述べている。

弁証家は存在がそれらすべてに共通する、あらゆるものについて議論するが、彼ら

はそれらが哲学に固有なものであることの故に、それらについて議論していることは明らかである。というのも、ソフィストの術と弁証術は哲学と同じ類に関わるが、哲学は弁証術とは能力の方向において異なり、ソフィストの術とは生の選択意志において異なる。弁証術は哲学がそれについて認識的であるものに関して、検証吟味的(*πειραστική*)である。(1004b18-26)

基本的に哲学的実践と弁証術的实践は個別科学の類にとらわれずに存在がそれらに共通であるあらゆるものを対象とする点において、それらの実践は対象として重なりあい、実践として連続的であると言えよう。他方、弁証術の本来的な仕事は「検証吟味」であり、哲学や諸学問と対比され「たとえば何が、何ら知識を持っていない場合でも、持ちうるもの」である。(172a21-23)それ故、弁証術は存在である限りの存在について「ソ피아(哲学的知識)」と呼ばれる認識を獲得する哲学、形而上学と区別される。「すべてのひとはソ피아と呼ばれるものが第一の根拠また原理についてあると考えている」。(981b28, 982a2, 171b34)世界の存在様式にコミットせず、言論の次元で吟味する検証吟味は弁証術の中心的な仕事であるが、私は弁証術が自律的に持つ可能性は、「能力の方向」において哲学的実践に利用されると解する。「能力の方向」という微妙な表現は、存在についての言明の批判吟味を目的とするのか、それとも存在について認識をもたらしそうとするのか、能力の使用目的において異なることを意味している。哲学者が弁証術的实践の成果を利用し哲学的認識に向ける時、その時は哲学を实践していると解すべきであろう。その時はもはやその実践は「強い弁証術」としてであれ、弁証術とは呼ばれるべきではないであろう。例えば、諸科学の第一原理を存在として探究する時、これは哲学の営みであり能力の方向が異なっていると言うべきであろう。

弁証術の理解にあたって注意を要するのは、説得的な問答の方法論の構築を企てるこの研究それ自身が、たとえ素材は実際の問答から得るにしても、弁証術的に行われているわけではないことである。つまり彼は弁証家として『トピカ』を書いているのではない。彼は諸学を総合的に秩序づける哲学者として弁証術を一つの技術として位置づけている。弁証術という方法の枠のなかでの問答の実践は弁証術的に行われるが、弁証術は幾何学や医術そして弁

論術のように一つの技術なのである。彼は弁証術について「われわれがこの方法を完全に持つことになるのは、弁論術や医術そしてそのような諸能力においてあるのと同じ状況にある時である。即ち、われわれが、利用可能なものどもから、選択するものをなすことができるという状況である」としている。(101b5-7)彼は他の諸技術と同様な確かさを弁証術構築において求めている。先述した「共有見解に基づき推論する……方法を発見すること」(100a18)がめざされるさいの、「方法(μέθοδος)」は「システム」という意味を持ち、システムは存在をめぐる範疇やプレディカピリアというアカデメイアの間答実践の理論化により形成されている。従ってこのシステムも問答実践から形成され、システムないし方法とその実践は常にフィードバックの関係にあるという意味ではプラトンの問答の伝統に属するが、弁証術的实践とそのシステム化は区別されるべきである。この実践は弁証術的になされるが、その理論化は、後述するように、存在分析の手法として第一哲学の方法ともなるそのようなものであることを指摘しておこう。『トピカ』の仕事が「弁証術についての研究」(46a30)と呼ばれる時、実践と理論双方を言及しているので、その後、今日まで「弁証術」ないし「弁証術的に」という語は解釈者たちにより双方を指示する広い意味で、言ってみれば曖昧に用いられてきたが、或る文脈においては弁証術的に議論することとその方法を展開する様式を厳密に区別する必要があることを念頭においておこう。そしてこれら双方が第一哲学構築に有益であることも指摘しておこう。

混同を避けるために、ここで命題が弁証術的に扱われる局面を確認しておこう。ある命題が弁証術的なものとなるのは、同意をとりつける一つの問いとなる時である。「弁証術的な前提命題は……共有見解の問いである。というのも、ひとは大衆の見解に対立するのでなければ、学者たちに思われていることに同意するであろうからである」(104a8-12)とも「諸技術に即した意見もみな弁証術的な前提命題であることは明らかである。というのも、ひとはこれらについて研究した人々、例えば、医術のことがらについて医者、幾何学のことがらについて幾何学者の見解に同意するであろうからである」とも規定されている。(104a33-37)つまり、共有見解に基づき応答を引き起こすよ

うな問いがあるとすれば、それは弁証術的なものとされる。最も広くとれば、同意か反対かの議論がなされる文脈において共有見解に基づき一つの命題が立てられた時、弁証術が司る領域にひとは足を踏み入れたことになる。例えば、「哲学者」が研究対象の一つとする「公理」と呼ばれる存在の原理である矛盾律についての一つの確立の仕方は弁証術的になされうる。(1005a 19ff) 矛盾律を疑い、その論証を求めるひとがいるとするなら、その疑い自身が矛盾律に則って提示されているのではないかと問うことができ、「論駁的に (ἐλεγκτικῶς)」(1006a12) 矛盾律を確定することができる。そのさい「もし反対論者が一言も言わないならば、何についても言論を持たない者に対して、そのひとが持たない者である限り、説明しようとすることは笑止なことである。……すでに植物のようなものだからである」(1006a13f)と言われるように、これは相手が反論に着手するのを待って初めて証明しようするような弁証術的な事態である。

アリストテレスは『トピカ』において、弁証術という議論の方法を、主に「ある」と「何であるか」の分析である範疇とプレディカビリアという存在分析の手法として展開している。彼は「弁証術という方法がいかなるものどもに基づいているかをまず理論化すべきである」(101b11)として、ソクラテスの「何であるか」の探究における応答を分類したプレディカビリア(固有定義、固有性、類そして付帯性という「定義的なもの」(102a9)と呼ばれる「述語づけ可能なもの」)に基づき、あらゆる命題や問題の吟味の方法を展開する。この範疇やプレディカビリアを用いた企ては弁証術的に展開されているのではなく、一つの技術を体系化している。議論は命題、問題に基づき生じるが、その命題、問題の数はさらに十個の範疇においてある四つのプレディカビリアに基づき四十に分類される。(101b12ff, 103b21, cf. 1b25-27)そして「どのように諸議論に対処すべきか」(101b12f)という問いへの回答は、『トピカ』全体においてなされるプレディカビリアをめぐるトポス論であると言える。(104a1f)トポス論は弁証術的議論の論点をメタな視点から提供するものである。

『トピカ』において方法としての弁証術を司っているあらゆる問題に対応可

能な言論構築の手法は、基本的には、形式的、一般的な次元で言論を取り扱う「ロギケー」およびその副詞形である「ロギコース」という手法であると私は解する。議論の方法としての弁証術は、『トピカ』において、存在の一般的な分析である範疇とプレディカビリヤを基に構成されているが、これは共有見解に基づいて存在にコミットすることなしになされる弁証術の実践と存在の一般的な分析を基礎に構築される弁証術の方法を区別する重要な論拠を提示している。弁証術の方法と存在論は共通の一般的な存在分析に基づいていると言える。アリストテレス自身の思考の発展としては、弁証術のこの分析道具が存在論構築の道具になったということであろうが、共時的には方法としての弁証術と存在論が一つの方法のもとに構築されたと言うことができよう。この方法論は哲学的実践がそれに託されている「ロギコース」と呼ばれる手法であり、これは能力の方向として存在探究に集中しソ피아を求めることのできるそのような手法である。アリストテレスは共有見解という現用言語の規範性を基礎に弁証術を利用しつつ、哲学的実践を行う言論様式を「ロギコース」という手法に託している。

5 「ロギコース」、*「ピュシコース」*そして「アナリュティコース」

この節から10節にかけて、アリストテレスの方法論が問題となる時、常に取り上げられる「ロギコース (λογικῶς)」と「ピュシコース (φυσικῶς)」と呼ばれる手法、さらに「ロギコース」と「アナリュティコース (ἀναλυτικῶς)」と呼ばれる手法を比較し、それぞれの方法の理解を深めたい。言論と自然と分析に関わるこれらの方法は基本的に弁証術、自然学そして論証理論という研究分野において形成されている。「ロギコース」は『トピカ』において展開される弁証術という問答の方法を初めとして、あらゆる言論構築において用いられうる手法であり、「ピュシコース」は生物学等自然科学の著作において展開される運動するものに関わる個別諸科学において用いられる手法であり、「アナリュティコース」は『分析論』において展開される論

証理論に関わる手法である。

「ロギコース」は自然学や倫理学をふくめあらゆる人間の言葉を使う営みに適用されうる手法であるだけに、あまりに一般的な理解に留まる可能性があり、理解は容易ではない。これは「語る(εἰπεῖν)」「言う(φάναι)」「確信する(πιστεύειν)」「研究する(θεωρεῖν)」「考察する(σκοπεῖν)」「探究する(ξητεῖν)」「証明する(δεικνύναι)」という動詞を伴い、基本的には探究や証明における一つの言論の立て方として、方法的な自覚のもとに用いられている。「ロギコース」は「いかに語るべきか(πῶς δεῖ λέγειν)」という手法であるというその一つの特徴づけが、誤解の余地のない仕方では、『形而上学』Z4においてなされている。(1030a25-27) この箇所については後に検討するが、「ロギコース」が言語の規範的使用をめぐる方法であるというこの明確な特徴づけを最も基本的な了解として念頭において考察を進めることにしよう。なお、この方法は、しばしば見い出される、もう一つの方法的自覚のもとに語られる「普遍的に語る(καθόλου εἰπεῖν)」と親近性を持っているが、それは「ロギコース」の分析のなかで示されるであろう。(1037a22, 1071a17, 1087b17, 280a33, 282a14, 83a1, 121a6, 141a15, 142b20, 748a8, 82b35, 84b2, 88a19, 204b4, 264a8, 316a11, 1069 a28)

「ピュシコース」に関しては、二つの意味があり、一つは、明らかに φύσει(「自然本性上」という名詞の与格形により副詞的な意味を持つものと同義に用いられる場合と、「自然学的に」という学問の方法という次元で用いられるものがある。前者においては「ピュシコース」は「成長する」「動かす」「色を与える」等の動詞にかかる副詞として用いられ、学問の方法を表現する次元とは異なっている。⁽¹⁴⁾ 他方、「ピュシコース」が「研究する(θεωρεῖν)」「考察する(σκοπεῖν)」「説明する(ἀποδοῦναι)」「見る(ἐπιβλέπειν)」等の学問的な方法や手続きを表現する動詞を伴う時は、「自然本性上」ということではなく、「自然学上」という知識を探究する方法的な自覚のもとに用いられている。(eg. 198a23, 204b10, 283b17, 304a25, 316a11, 1147a24) これら二つの方法論上の表現がほぼ同じ動詞を伴うという言語表現上の事実はピュシケーとピュシコースが対になるように、ロギケーとロギコースが対になっている

ことを示唆し、理解の困難なロギコースがピュシコースに対応する学問的な方法論の表現として用いられていると理解するよう促している。

「アナリュティコース」は、これら二つの方法と比較し、より限定的に使用されており、理解が容易である。これも「確信する」や「証明される」を伴い、やはり一つの方法論を表現し、「分析論上」「分析的に」と訳しうるものである。(84a8, 84b2) これは「アポダイクティコース (論証上)」という副詞表現と親近性を持つ。(75a12, 1418a39)

現存著作においては、「ロギコース」は13回、「ピュシコース」は16回使用され、「アナリュティコース」は2回用いられているが、これら三つの方法について、すべての個々のテキストに当たり詳しく検討することにする。⁽¹⁵⁾ なお、これらの形容詞表現「ロギケー」「ピュシケー」「アナリュティケー」[いずれも男性、中性形また複数形を含む]も、「学問」や「知識」、「研究」さらには「技術」そして「命題」等の名詞を形容することのできる学問探究上の分類機能を持ったものであると言える。ロギケーは19回使用される。ピュシケーはとても多く101回見られるが、そのなかには『自然学』を指示する名詞用法も多く含まれている。「アナリュティケー」は30回であるが、「分析的学問」(1359b10)を除いて、他はすべて『分析論』への言及として用いられている。ここでは、従来正確に理解されてこなかった「ロギケー」の形容詞用法については網羅的に触れることにする。この形容詞表現は比較級においてなされることもあり、程度の差を許す幅広い適用範囲を持つが、その副詞表現「ロギコース」が言語の規範的使用をめぐる手法であるということ念頭において、その関連性のうちに、考察を進めることにしよう。

これらの三つの方法の関わりをめぐり、アリストテレス哲学の体系的な理解の可能性にかかわる方法論上の問いが存在する。一つはピュシコースとアナリュティコースに関わるものであり、彼の体系的な理解を妨げるやっかいな問題として論じられている。それは生物学等の諸著作における実際のアリストテレスの科学的実践が、『分析論後書』において科学的知識を獲得すべく構築された論証理論の教示に従っていないということが指摘されている。数学を範型にした論証理論に適合する科学的探究の事例を個別諸科学の実践に

において見いだされないのではないか、具体的には彼の科学的実践の著作例えば『動物誌』や『動物部分論』と『分析論後書』のあいだに不整合があるのではないかということが疑われている。すなわち科学的知識を得るその理論と実践のあいだに連関がないという疑いである。この論争を再燃させた J. Barnes は、彼の『分析論後書訳注』の第二版で第一版出版以降のこの問題の議論を振り返るべく「補遺」を書きたし、次のように述べている。「科学的諸著述と『分析論後書』のあいだには、少なくとも表面上は、ほとんどないし全然連関がないことは気付かれていた。そしてこれが私の 1969 年の論文の出发点であった。このように生物学的諸著述はいかなる明確な三段論法を含まず、またそれらはいかなる公理論的構造を表わしているようには見えない」。このように彼は「『分析論後書』において展開された理論とアリストテレス自身の科学的な仕事のあいだの関係は何か」を改めて問うている。⁽¹⁶⁾ この問題には本稿 13 節において応答を試みたい。

もう一つはアナリュティコースとロギコースに関わるものである。これは弁証術とロギコースの一つの解釈に基づいて提示されるアポリアであるが、ひとは弁証術において共有見解から、いかにして因果論上の知識に、とりわけ存在の原理の知識に到達するのかが問われている。換言すれば、『トピカ』における共有見解に見られるわれわれにとって先なるものから、『分析論後書』において展開される因果論的構造や『形而上学』における存在の原理のうちに見られる本性上先なるものへ到達する道はいかなるものであるかが問われている。(cf. *An. Post.* A33) T. Irwin は「一つの重大な困難」として「アリストテレスの弁証術的な方法はそれが客観的な第一原理に体系的に到達すると信じるいかなる理由をも提供しているようには思えない。……弁証術的哲学の使用は極度に限定されていると思われる。われわれはそれが真理に導くと主張するいかなる理由をも持たないと思われる」と述べている。⁽¹⁷⁾ この問題に対しても、本稿 14 節において応答を試みるが、これまで「ロギコース」は弁証術の方法としてではなく、弁証術的な実践としてのみ捕えられ、その役割が正しく理解されてこなかったために、統一的な理解が妨げられてきたように思われる。彼の哲学の体系的な理解を困難にするこれら二

つの問いを念頭に、ロギコースの理解を中心に進め、これら三つの方法が形而上学構築にいかなる貢献をなしうのか、その可能性を探りたい。

はじめに、ロギコースとピュシコースのそれぞれの理解および関連について明らかにしたい。ロギコースとピュシコースの原形である「ロゴス(言葉)」と「ピュシス(自然)」はアリストテレス哲学の主要概念を構成するものであり、含意豊かなものである。その派生であるこれら二つの副詞表現も文脈によっては相補的な方法として、或るいは相違する方法として論じられることもある。従って、それぞれの文脈を見極めたうえでそれぞれの特徴を理解しなければならない。二つの方法の理解のために、まず見取り図として一般的な見解を参照しておく。D. Charles は「私は「ロギコース」を一般的な種類の考察に基づいているが、或る科学や主題に特有の原理に基づいてはいない、一つの対処の様式を指示するものとして解する。それとの対比において、諸考察が「ピュシコース」であるのは、それらが或る主題に固有である場合である」と述べている。⁽¹⁸⁾ 藤井義夫は「一般的な解釈に従えば、ロギコースの態度とは凡ての学を支配するところの抽象的な形式概念に従って論理的に、ピュシコースの態度とは各々の学に固有なる具体的原理に即して自然的に研究することである」と定説を整理している。⁽¹⁹⁾ 一般的な考察と主題に固有な考察さらには抽象的形式的考察と学の固有原理に即した考察という分節は二つの方法の見取図として有効である。しかし、Charles や藤井の「学問」や「主題」に「固有な」考察という理解は、すでにアナリュティコースな手法のもとに学問上分節されたうえでのピュシコースな考察を指示しているように思われる。私はこの手法の主題が運動する大きさをもつものであるという、より原初的な分析をテキストに基づき示すであろう。尚、ロギコースについて藤井の「論理的に」という形容はこの手法の必要条件に止まる。G. Owen や E. Berti がこれを「概念分析」と表現する場合も、この手法の必要条件を述べるに止まっている。⁽²⁰⁾ 現実世界への直接の参照なしになされる議論は当初において概念の分析と言えようし、それが論理的に整合な議論でなければならないが、アリストテレスは後述のように、概念分析に止まらず、「いかに語るべきか」という視点から「それ故に X は存在しなければならない」という

仕方で存在主張をなすにいたるまでの言論の力としてこの手法を用いていることを明らかにするであろう。⁽²¹⁾

一般的には、「論」と「証拠」という議論のたて方があるが、論より証拠であれ、証拠より論であれ、また双方が相補的に働くものとしてであれ、探究のふたつのアプローチが区別される。アリストテレスは「論(λόγος)は現象の証を立て、そして現象(φαινόμενα)は論の証を立てるように思われる」(270b4f)と相互の相補性を主張する。ただしこの発言は宇宙の諸物体のなかでの「第一実体」が永遠で神的なものであるという、一つの究極的な事例の文脈においてなされているために、そこでの証拠とは「少なくとも人間的な信念に対して語るに十分な仕方で、感覚を通じて」与えられるそのような間接的なものである。(270b11-13)現象の観察と言論構築という真理への少なくとも二つのアクセスがあり、「ピュシコース」と「ロギコース」は概略この二つのアクセスに対応することを確認できたこととしよう。

従来、「ロギコース」という手法に関して「通常その意味は軽蔑的」(D. Ross)とも「この[手法の]一般性が、結局、正確さを妨げまた混同を可能なものとする」(J. M. Le Blond)と否定的な評価が下されることが多い。W. Jaegerの主導する発展史の立場から「一般的なものに対する不信はより後期の作品においてとりわけ際立っている」(LeBlond)という見解も同様である。⁽²²⁾しかし、二つの手法の優劣を比較すること自体、アリストテレスの意図にそぐわない、誤解を招く理解である。二つの手法は各々適切な状況において用いられる時、各々適切な方法たりえ、形而上学構築においては相補的であることを明らかにしたい。さらに、この二つの相補性を実現させるものとして、アナリュティコースとそれに基づき展開されたもう一つの方法、説明論的アプローチがある。形式言論的な探究は自然世界における探究の方向づけをなし、自然学的な探究はその方向づけを具現化するが、その具現化がそのもとになされる表現様式が論証理論とその展開である説明論的アプローチであることを明らかにしたい。換言すれば、ロギコースという手法が言葉の分析を介して、ピュシコスな探究を導くガイドの機能を果たし、アナリュティコスな表現様式のもとで、ピュシコスな探究は知識を獲得するに至ることを明ら

かにしたい。

6 「形式言論構築術」の展開と位置

ここで形容詞「ロギコス λογικός (-ή, κόν)」およびその副詞表現「ロギコース」の言語表現上の一般的な理解を最初に得ておこう。はじめにプラトンとの連関を言語表現の上で探る。プラトンには「ロギコス」[中性, 女性形をも含め]そして, その副詞形である「ロギコース」は見当たらない。それに対し, 「アンティロギコス」[中性, 女性形をも含め]および「アンティロギコース」(*Theae.*, 164c のみ) が用いられる。これはソフィストが論争の技術において用いる, 反対命題を探し相手を論駁する論法を表現している。(eg. *Resp.*, 454a, *Soph.*, 225b, 226a2, 232b, e. *Phaedr.*, 261b10)⁽²³⁾ *ἀντιλογικός* は「矛盾」や「反論」「論争」を意味する *ἀντιλογία* の派生である。アリストテレスは *λογική* (-κός) によって彼はソフィストのように反論のための反論として矛盾対立論法を用いるのではなく, *ἀντιλογικός* から否定的な前置詞 *ἀντι-* を象徴的に取り去り, 建設的に用いられうる言論一般に関わる領域を *λογικός* (-κή, κόν) という形容詞により表現したのではないかと推測される。アリストテレスは一度 *ἀντιλογικός* (反論者) を名詞として用いている。「帰納は, 感覚に即して一層説得的かつ明瞭で一層可知的であり, また大衆に (*τοῖς πολλοῖς*) 共通 [に使用されているもの] であるが, 推論は, 一層強制的でありまた反論者たちに対して (*πρὸς τοὺς ἀντιλογικοὺς*) 一層効果的である」。(105a16-19) ここで大衆と反論者が対比されているが, 「反論者」により, 大衆を操作する反論の専門家である「ソフィスト」が含意されると解釈することは強ち不当とは言えないであろう。アリストテレスが『トピカ』において形成した問答の方法論としての弁証術的推論はソフィストたちの詭弁や修辞に対抗しうるものであることがめざされている。*λογικός* (-κή, κόν) という彼の造語はプラトンの *ἀντιλογικός* の用法からの象徴的な転用であると推測することができよう。しかし, *λογικός* (-κή, κόν) というこの形容詞はその長い解釈の歴史が示すように, 「翻訳と解釈双方において

難しいもの」であり、この歴史的展開の推測は推測に止まり、彼の新語の理解に影響を与えることはない。⁽²⁴⁾ 私はこの新語について何らかの包括的な理解を得たいと思う。

「ロギケー (λογική (-κός, κόν))」という形容詞用法は、その概念の形成に密接に関連すると考えられる『トピカ』において見られるが、一つの命題や問題群を集積する言葉として用いられている。『トピカ』A14 の「ロギケー」という形容詞に注目したい。そこでは女性形は「命題」を中性形は「問題」を形容している。⁽²⁵⁾ 命題の選択や形成の仕方を論じる文脈において、議論を構成する命題と問題の種類は「概略」三つであり、「自然学的」「ロギカイ [ロギケーの複数形]」そして「倫理的」に分類される。(105b19ff) 例えば、自然学的なものは「はたして宇宙は永遠であるか否か」というものであり、倫理的なものは「もし見解が異なる場合に、法律よりも両親に従うべきか否か」というものである。また「ロギカイ」な命題、問題の例は「はたして対立物に同一の知識があるか否か」というものである。

これらの記述から明確に言えることは、ロギケーが自然学や倫理学を形成する諸命題と同じ学問構築的な次元で対処されうる命題群から構成されていることである。自然的な命題や倫理的な命題の秩序ある集積が自然学や倫理学を形成するように、「同じ」や「対立」等の普遍的な語を用いる思考から言語網が形成されるロギケーな命題は何らかの学問や技術を構築すると理解することができる。λογική は後に「論理学」と呼ばれるが、それはこの術が形式的な言論から構築されているからである。⁽²⁶⁾ さらに「天文学 (ἀστρο-λογική)」と「神学 (θεο-λογική)」は接尾辞として λογική を伴っている。(46a19f, 291 b21, 1026a19) そしてこれら二つの学問が λογική を伴うのは偶然ではなく、二つとも経験との関連を十分もちながらも、その対象である星と神はそれ自身としては自ら運動しないものであるが故に、言論の力に訴えずには構築できない学問だからである。(290a29, 1072b28-30, 1073b1-8, 258b12) 普遍的な存在論と帰一的な構造を持つ第一哲学としての「神学」さらには宇宙の永遠性や無限性を論じる「天文学」がロギケーという接尾辞を与られていることは、この語句の理解に示唆を与える。ここでは「ロギケー」

が何らかの学問構築的な命題や問題群を表現していることを探究方向の基本的な了解事項とし、最終的には神学の構築をめざす可能性を視野にいれ、この実質の探究に向かおう。

『トピカ』A14 においては、これらの三つの分類に続いて次のように述べられている。

先に語られたものども〔倫理的、自然学的、ロギケーな命題、問題〕のそれぞれがどのようなものであるか、これらについて定義を与えることは容易ではない。語られた範例に即して考察しながら、語用の帰納を通じてこれらのそれぞれを知るよう試みるべきである。かくして、一方、これらについて真理に即して哲学に従事すべきであり、他方、弁証術的に(διαλεκτικῶς)ドクサ(意見、見解)に従事すべきである。しかし、あらゆる命題をとりわけ普遍的に容認すべきであり、そしてその一つの命題を多くの命題に形成すべきである。例えば、対立するものどもに同一の知識がある、これに続いて反対なものどもにそして関係するものどもに同一の知識があるというように。これらを再び同じ様式で、分割できる限りにおいて、分割すべきである。例えば、善と悪について、そして白と黒について、また冷と熱についてというように。(105b30-37, cf. 403a2)

この箇所から伺える一つのことは、三つの命題、問題群に定義を与えることは容易ではなく、サンプルを挙げて帰納的に判別していくほかに術はないということである。なによりも重要なことは、これらの命題や問題群が哲学の実践において真理を探究し知識を得るために用いられることもあれば、ドクサの次元でプロとコントラの見解を提出することそれ自体をめざすべく弁証術的に取り組むこともあるということである。これら二つの営みは、先に見たように「能力の方向」において異なる。倫理的、自然学的な命題や問題を「とりわけ普遍的に」取り上げるさいには、個別科学が持つそれぞれの類を超えるところで対処され、それは哲学的言明にも弁証術の問題にもなるそのようなものである。このように普遍的ないし形式的な術語を用いて形成される命題がロギケーなものである。例えば「対立するものどもに同一の知識がある」と容認することは、ロギケーな命題が冷と熱という自然学の次元においても、善と悪という倫理学の次元にも適用され、それと同時に自然学的そして倫理的な双方の命題をも包摂する普遍的なものであり、このように個別諸科学への適用可能性とその包摂という二つの性質を持つことを示

している。なお、ロギケーな命題にはさまざまな程度が考えられ、どこからどこまでがこのジャンルに属するかは判定しがたいと言うべきであろう。ロギケーな命題群の普遍的性格は上記の三つの命題群の部分領域上相互排他的であると理解してはならないということを含意する。

またこの箇所は「ロギケー」が自然学や倫理学と同様に、哲学においてもまた弁証術的にも対処されうる、そのような命題、問題群であることを表現している。諸学の具体的な命題であれ普遍的なそれであれ、或る定立命題を吟味するために対立見解を共有見解に基づき提出する時、それは弁証術的な問題として弁証術的に論じられる。他方、命題の定立を学の構築のためになす時、それは自然学、倫理学そしてロギケーな知見、知識に向かう。そのさい、学の構築に従事するそれぞれの研究者はプロとコントラの議論を構成する弁証術的なアプローチを利用して、真理に即して知識を打ち立てることを妨げるものはない。以上のことから、「ロギケー」の訳としては“τέχνη”が補われるさいには「形式言論構築術」をあて、形容詞用法としては「形式言論構築術的」という訳をさしあたり与えておこう。というのも、一般的な言明は、そこから適用と包摂により学問や技術に至るまでの多くの議論を構築することができるからである。この訳が適切であるかどうかは今後吟味されることになる。

A14 のこの箇所は A11 における「弁証術的問題」の三つの区分との対応において解釈されることがある。A11 において、アリストテレスは次のように述べている。

弁証術的問題とは、その問題について人々がいかなる意見をも持たないか、大衆が学者と、或るいは学者が大衆と、またはそれぞれの人々が自分たちの内部で反対の見解を持つものについて、[a] 追及と忌避のために、或るいは [b] 真理と認識のために、或るいは [c] それ自身ないし協力するものとして、そのようなものどもとは異なる他の何かのために、向かう思弁である。即ち、問題の [a] 或るものども、例えば、快楽は追及されるべきものか否かを知ることは追及することないし忌避することのために役に立つ。[b] 他のものども、例えば、宇宙は永遠か否かを知ることは、単に知ることのために役に立つ。また、[c] 或る諸問題それ自体はそれ自体に即して、これらのいずれでもないもののためにはあるが、このようなものどもの何ものかのために協力する。というのも、われわれは多くの弁証術的問題自体をそれら自体に即して知

ることを望んでおらず、それらを通じて何か他のものを知ることができるように、他のものどものために知ることを望んでいるからである。

ところで、反対の推論がそれについて成り立つ問題がある。というのも、双方について説得的な議論が存在する故に、はたしてこのようにあるか、このようにないのかアポリアとなっているからである。また、問題が大きくて、何故にそうであるかを説明することが困難であると思われる、例えば、はたして宇宙は永遠であるか否かという、それらについてわれわれが議論を持たない問題がある。というのも、ひとはそのようなものを探究することができるであろうからである。問題と命題は、語られたように、規定されたこととしよう。

さて、哲学において知名なひとの、パラドキシカルな (*παράδοξος*) 見解は立論である。例えば、アンティステネスが言ったように「反論することはありえない」、或るいはヘラクレイトスによれば「万物は動いている」、或るいはメリッソスが言うように「存在は一である」のように。というのも誰かがたまたま主張しているというだけで共有見解に反対なものを熟慮することは愚かなことであるから。或るいは、ドクサに反対する説明言表をわれわれが持つものについてもそうである、例えば、ソフィストが言うように、存在するすべてのものは生成するものかそれとも永遠なものかではない、というのも、芸術的であるひとが文法的であることは生成したのでも、永遠であるのでもないからであるという場合のように。というのも、或るひとにはそう思われない場合でも、説明言表を持つことの故に、そうであると思うようになるでもあらうからである。

かくして立論は〔弁証術的な〕問題である。しかし問題のうち或るものどもはわれわれがいかに見解を持つものではない類のものであるので、すべての問題が立論ではない。しかし、立論は問題である。というのも、立論が何かパラドキシカルな見解である以上、大衆が学者と立論について意見を異にするか、学者たち自身のあいだで意見を異にするということであることは語られたことから必然だからである。今やほとんどすべての弁証術の問題は立論と呼ばれる。(104b1-36)

この興味深い箇所は弁証術の営みとロギケーの関係を理解するうえで重要である。アリストテレスは A14 において「命題と問題の部分は三つである」として「倫理的」「自然学的」そして「ロギカイ」を挙げ、概略であれ三つのグループに命題と問題を分けていた。この A11 においては弁証術的な問題が [a] [b] [c] の三つの事柄に方向づけられている。そのなかで [a] 追及と忌避は A14 の倫理的な問題や命題に、[b] 真理と認識は自然学的なそれに対応すると解釈するのが、ここであげられる事例からしても、自然であるとなれば、[c] はロギカイつまり形式言論構築術的なものに方向づけられて

いると見るべきであろう。その点で、Alexander と同様に A11 と A14 の平行関係を主張することができる。しかし、[c] はあいまいに表現されている。[c] は [a] [b] と同様に二箇所で見られる表現されており、順に [c 1] [c 2] と呼ぶことにするが、[a] [b] が二度同じものを表現している以上、これらが同じことを意味していると理解すべきである。すると [c 1] は「弁証術的問題は……それ自身または協力するものとして、そのようなものども [a] [b] とは異なる他の何かのために、向かう思弁である」と訳されよう。他方、[c 2] は「或る諸問題それ自体はそれ自体に即して、これらのいずれ [a] [b] でもないもののためにではあるが、このようなものども [a] [b] の何ものかのために協力する。というのも、われわれは多くの弁証術的問題自体をそれら自体に即して知ることを望んでおらず、それらを通じて何か他のものを知ることができるように、他のものどものために知ることを望んでいるからである」と述べられている。ここで、弁証術的な問題の或るものどもには強意代名詞 *αὐτό* 「それ自体」が付加され、弁証術的な問題がそれ自体として知られることが重要なことではなく、何か他のものの知識に協力するものとして描かれている。そして [c] は [a] [b] のようなものではあるが、[a] [b] とは異なり、弁証術的な問題の協力を得て認識されるもののことである。そしてこれらがロギカイな問題であると言える。

Alexander は先の A14 のロギカイが何であるかをこの箇所から理解している。彼は「実践的なものとして探究されのでも、またそれら自身のうちに真理の認識を目標として持つものでもないが、追及されるものどもとそうでないものの認識のために、或るいは真理と偽の発見のために協力するものとして探究される限りの問題はロギカイである。ロギケーな研究は哲学において道具の場所を占める」と述べている。⁽²⁷⁾ このように、Alexander は A14 におけるロギカイな命題、問題を A11 の [c] と同定している。従って、彼にあってはロギカイは「弁証術的」と同義であると解されることになる。⁽²⁸⁾ しかし、私は A14 においてロギケーな命題、問題群が弁証術的にもさらに真理のためにも従事されることを確認した。ここでも、弁証術的な問題が「他の何か」の認識のためにあるところのその「何か」がロギケーな問題であると解すべ

きである。アリストテレスは明確に弁証術的な問題とロギケーな問題を区別していたと言うべきであろう。或るいは、より正確には、これらは領域的に異なる問題なのではなく、一つのロギケーな問題が弁証術的な問題となりうると理解すべきである。

なお、ここで弁証術的な問題が自然学上の知識に、さらには倫理学上の追及と忌避に「向かう (*συντρέχειν*)」(104b1)のものであり、そしてこの「他の何か」としてのロギケーな認識に「協力するもの」(104b3, 9)とされ、またそれらに「役に立つ」(104b6)と特徴づけられるが、これは先に見た A2 において、弁証術がこれらの学問的な理解と実践に「役に立つ」(101a26)とされていることに軌を一にする。それぞれの学さらにロギケーと弁証術は同じ次元のものではないことが確認されよう。自然学や倫理学そしてロギケーは弁証術的な問答を通じて、それらの知見を自らの学に利用する。ここに弁証術はドクサの次元で対立する見解があるところに成立する言論の技術であり、それは諸学に有益なものとなることを見て取ることができよう。

A11 と A14 これら二つの箇所において共通しているのは共有見解と共有見解に対立する立論が話題になっているその文脈である。(cf. A14. 105b11) パラドクシカルな見解は意見の対立を呼び起こすから弁証術的な問題となるのであり、「立論は[弁証術的な]問題である」(104b29)とも、「今やほとんどすべての弁証術的な問題は立論と呼ばれる」(104b35)ということになる。はじめから弁証術的な命題や問題というものが存在するわけではない。自然学的であれ、倫理学的さらにロギケーな命題であれ、対立する見解があるところ、そこで弁証術的に問題を処理しようとする時、その問題は弁証術的な問題になる。

ロギケーをはじめ倫理学的、自然学的問題はドクサの次元で弁証術的に論じられもすれば、真理に即して哲学的にも論じられうる。しかし、自然学的なものも倫理学的なもの、ロギケーなものも、共有見解とパラドクシカルなものの対立において考察する弁証術的な問題になってしまうことをアリストテレスは否定的に述べているわけではない。弁証術的实践のどの段階においてあれ方向において知識を求めるものとして展開する時、それは自然学者が

自然物の知識獲得のために、また哲学者が第一哲学ないし存在論構築のために、その成果を利用していると理解すべきである。

従って、「ロギケー (λογική (-κός, κόν))」はそのまま「弁証術的な」命題や問題のことではなく、自然学的な命題や問題が知識のためにも、また弁証術的にも取り扱われうるように、たとえ共有見解に反したものであれ、またそれに対する反対命題が共有見解から提出される類のものであれ、論者がどのような意図のもとにその命題、問題に対処するかに依存する、そのような命題、問題群のことを意味している。⁽²⁹⁾

ロギケーの第二の用例を見てみよう。彼は『トピカ』E1における固有性の議論のなかで、「ロギコンな問題」に言及している。例えば、固有性のなかで自体的な問題や恒常的な問題は「とりわけロギコンな問題」(129a17)であるとされるが、その理由は自体的なものと恒常的なものは「多くのものに関係させて証明を企てることができ、また多くの時間をかけて連続的に観察することができる」からであるとされる。(129a21-23)これに対し、一時的な固有性については「今の時間だけに関係して」検討することができるだけであるので、あまりロギコンな問題とは言えないであろう。(129a28f)彼はこのように議論の様式の比較から「ロギコン」を次のような特徴をもつものと規定している。「言論がそれに関して長くかつ美しいものでありうる問題がロギコンである」。(129a29-31)従って、問題にはさまざまなものがあるが、個別的に特定するのではなく、多くのサンプルを集め、美しくつまり明確に、一般的な仕方形成される言明が「ロギコン」な問題であると理解することができる。ここで「美しく」という価値表現は、A14においてロギケーが自然学的また倫理的な命題と比較されている事実や、天文学や神学の学問的営みの接尾辞として用いられることとあいまって、「ロギケー」が学問という言論により構築される一つの肯定的な言論の営みを意味していることを伝えている。学問は一つの美しい普遍的な言論の体系であると言える。この箇所も「形式言論構築術的」と訳すことができるであろう。

第三の用例は、『トピカ』Θ 12 において、彼が誤ったないし偽りの議論の分析を行っている文脈において見られる。彼はそこで虚偽な議論のなかで優劣

をつけている。そのさい検討事項は三つあり、第一に推論として結論に到達しているかどうか、第二にその結論が真であるか、偽であるのか、第三にどんな諸前提から結論づけられたかを検討することである。第三の検討事項に関して、アリストテレスは次のように細分しつつ、「ロギコス」に言及している。

もし虚偽の共有見解から推論されるなら、それはロギコスである。他方、一方真実ではあるが、他方共有見解でないもの (*ἀδόξα*) どもからであるなら、それはつまらない。さらに虚偽でありまたまったく共有見解でないものであるなら、それは「議論そのものとして」端的にであれ、事物との関連においてであれ、つまらないものであること明らかである。(162b27-30)

ここで「ロギコス」が共有見解からの推論であるために、弁証術的と理解されることが多い。⁽³⁰⁾ これまで見てきたように、ロギコスが弁証術的に対処されることはありうるが、そのまま弁証術的ということでないとするなら、そうではない可能性を探るべきである。比較されているのは、たとえそれが真実であるにしても、共有見解でないものつまり人々の思いのおよばないものに基づいて推論を試みるなら、端的につまり議論それ自体としてみて、議論がそれ以上展開しようのないものなので、つまらないということである。この対比を維持するなら、共有見解に基づいているからそのまま弁証術的な推論だというのではなく、言論構築的、言論喚起的なものだということが読み取れる。このことに関連して、『分析論前書』B2-4 においてアリストテレスは詳しく虚偽な前提から真なる結論が推論されるパターンを分析している。この種の推論が「ロギコス」と呼ばれているのは形式的な言論の学である論理学を構築する素材を提供しているからであると思われる。

以上、この概念の形成期と考えられる『トピカ』の分析から私は、さしあたり、「*λογική* (-κος, κον)」を、言語の一般的、抽象的な用法を表現し、何らかの一般的な言明にかかわる学問を構築する肯定的可能性を持つものとして、「形式言論構築術的」という訳を与えておく。彼の「ピュシコース」と「ロギコース」の対句としての使用そして弁証術的な扱いと哲学的扱いの対比は、ピュシケーな命題をディアテクティコースにもピュシコースにも扱うるよ

うに、ロギケーな命題をディアレクティコースにもロギコースにも扱いうることを示唆しており、そのことは「ロギコース」を実際には『形而上学』等においては存在論構築のための学問的な方法を意味していると解することができよう。『トピカ』における範疇やプレディカビリアを用いる弁証術の方法がロギコースに構築され、そこでは弁証術的实践とのフィードバックの故にこの方法も弁証術の一部に帰属させることができようが、実は存在の一般的考察の方法でもある以上、弁証術と存在論に通底する方法論として理解すべきであろう。続いて、この表現の他の書物における他の文脈における用法の分析を通じて、さらに検討し、包括的な理解を得、この理解の正しさを確かめたい。

7 ロギコースとピュシコースの本来的な機能の場

最初に、ロギコースという方法がピュシコースという方法といかなる関係にあるかに焦点をあて、探究対象の本性によりどちらの方法が重視されるべきかが異なり、それぞれの特性がいかにされる文脈の異なりを確認し、総じて相補的であることを見ておきたい。

『生成消滅論』A2において、「不可分割的な大きさは存在するか」というカントのアンティノミーの一命題であり、今日の素粒子理論に対応する問いの文脈で、アリストテレスは先行哲学者の探究対象に対する態度の適切性の優劣から、二つの方法の相違を次のように述べている。

諸同意事項〔データ〕を全体として観ること（*συννορᾶν*）をより劣った仕方ではできないことの原因は経験不足（*ἀπειρία*）である。それ故、自然的な事実をより多く身近なものとしてきた人々は、より優れた力で〔諸同意事項を〕結合させるそのような原理を指定することができるが、わずかな事実を目を向けた（*βλέψαντες*）だけで、多くの議論に費やし、存在するものどもについて研究することのない人々（*ἀθεώρητοι*）は容易に教条化してしまう。これらのことから、ピュシコースに考察する人々とロギコースに考察する人々がどれほど相違しているか見て取ることができるであろう。というのも、不可分割的な大きさが存在するという点について、或る人々〔プラトニスト〕は〔さもなければ〕三角形それ自体は多になるであろうからと主張するのに対し、デモクリトスは主題に固有な自然学的な議論により確信したと

見られるからである。(316a5-14)

ここでは二つの方法の相違が歴史上跡づけられている。データを集積し仮説を作る能力さらには事象の根拠や原理を把握する能力においては、自然事象に親しんできた人々が、単に議論に時を費やしてきた人々より優れているとされる。具体的には、不可分割的な大きさの存在という自然学の対象に対する論証の方法として、プラトニストは、それがなければ三角形それ自体は多になるであろうからと、イデア論の諸性質に訴えて主張するのに対し、デモクリトスは対象に固有な議論により、つまり自然学的な議論により論証を提供し確信を得たと報告されている。同一の結論ではあるが、後者がこの現代物理学の素粒子理論に対応する主題に対しては適切な態度であることが主張されている。

ここで注意すべきことは、議論に基づくロギコスな手法と観察に基づくピュシコスな手法という思考様式の「相違」の大きさが指摘されているが、ロギコスな考察一般に対して否定的な見解が提示されているわけではないことである。否定されているのは、自然事象に対する観察を怠って、議論のみ従事して、イデア論から不可分割的な大きさの存在を主張するプラトニストたちの全体的な探究態度である。ここで全体的ということイデアという探究対象をもふくめ、自然学的な態度を無視したことも含まれている。

ここに、二つの方法の歴史的源泉を見い出すことができる。「ピュシコース」とは歴史上デモクリトスや後述するエンペドクレス等自然学者にその方法の範例を見い出すことができる。先行自然学者の自然探究をアリストテレスは自らの術語で「最初に哲学した人々の大多数は質料の種類のうちにあるものだけをすべてのものの原理であると考えた」(983b6f)としている。自然学者たちはアリストテレスにとっては質料という限定された自然理解のもとに考察を進めたが、彼においても質料は運動の座として自然学構築の一つの基本を提供している。彼は「自然的なものの説明言表は運動なしにはなく、常に質料を持つ」(1026a2f)と述べ、彼は先行自然学者たちの自然物、自然事象(*τὰ φυσικά*)についての伝統的な理解を、質料の運動としてを自らの枠組みにおいて描き、彼らの立場を引き受けている。『天体論』の冒頭において彼は次の

ように自然についての学の対象についてまとめている。「自然の学はほぼ大部分において、物体そして大きさそしてこれらの様態であるところのものと運動についてあり、さらにこのような実体に関わる限りにおける諸原理についてである」。(268a1-4) 従って、「ピュシコース」という手法は歴史上質料を持つものの運動という視点から自然学的対象を観察し研究する手法であるということ、最も基本的な事実として踏まえておかなければならない。

だが、アリストテレスは先行自然哲学者と自然の理解を異にすることから、探究対象において彼等との相違を明確にしている。自然探究における伝統の継承と独自の歩みを『自然学』B7に見い出すことができる。「根拠は四つあるので、これらすべてについて知ることは自然学者の仕事であり、そして彼は「何故にか」を質料、形相、動かすもの、目的これらすべてに導いて、ピュシコースに「自然学的に」説明するであろう」。(198a22-24) 自然学者は自然物、自然事象の根拠を探究するが、その根拠には四種類があり、これらすべての根拠に関わる。⁽³¹⁾ これまでの自然学者と異なり、自然学者は形相や目的をもふくめ所謂四原因すべてを研究対象としていることが確認されている。これはアリストテレスの自然理解から導きだされるものである。(cf. B1-B3, 198a22-27) このことはソクラテス以前の自然学者のみならず現代の「自然科学」とアリストテレスの「自然学」の理解の差異を際立たせている究めて重要な論点である。彼は先行自然学者たちが存在の原理を「物的なもの」(eg. 987a4f)のみに還元したことに異議をたて、次の興味深い発言をなしている。

しかし、これらの人々とこの種「火や土」の原理が現われてのち、存在者の自然が生じるためにはこれらは十分なものではなく、今度は、言ってみれば、真理そのものにより強制されて、人々は次の原理を探究した。というのも、存在者が、一方では、善でありまた美しくあることの、他方、そうなることの根拠が、まさか火や土やその他このようなものどもであろうはずはなく、かの人々もそう考えていたようでもないからである。なお、これほどの事物を自己偶発や偶然により保持することは適切なことではなかった。(984b8-15)

このように秩序正しくあることひいては存在者が価値あるものであることの根拠の探究はアリストテレスにおいては自然学の対象であり、彼は「自然はあらゆるものにとって秩序の根拠である」と主張する。(252a12f) 自然事象

がかくも秩序正しいのは形相因や目的因が自然事象の根拠であるからである。このことは存在としての存在の根拠として形相因や目的因が形而上学的原理としてたてられることの一つの経験的基礎を提示しているとともに、自然学を形而上学のもとに包括的に理解する可能性を開いている。

かくして、自然的事物や事象が何故にあるかをピュシコースに説明することは四つの根拠に言及することにより解明することである。『自然学』B7において、なぜわざわざ「自然学者 (*φυσικός*)」が自らの学問的手法に従ってという意味で「自然学的に (*φυσικῶς*)」という表現が用いられるかと言えば、一方では、先行自然学者たち (*φυσιολόγοι*) とは異なり、対象は四種類の根拠であるが、他方、その方法としては伝統的に自然学者たちの方法を継承しており、形相や目的を探究するからと言って、パルメニデスやプラトンのように探究するのではないということを強調するためである。自然学上の探究において理由根拠の提示は自然学的に行われなければならないことがここから明確に読み取ることができる。

他方、彼はピュシコースに語りうる対象の限界について触れており、ピュシコスな手法の限界も明らかにしている。彼は「存在が一でありそして不動であるかは自然について考察することではない」(184b25f)と述べ、自然の探究の領域を限定している。なお、彼はパルメニデスやメリッソスが生成と消滅をまったく否定したことに言及し、「彼らは他の点ではうまく語っているにしても、少なくともピュシコースに語っているとは看做されない。というのも、不生でまた一般に不動なものが、存在するものどもの何ものかであることは、自然学的な考察とは別のそしてより先なる研究に一層属する」と述べる。(298b 17-20) ここでも研究対象にふさわしい考察方法が吟味され、所謂論理的存在論を説くパルメニデス等はロギコースに議論を展開しているが、それは不動な永遠な存在については適切な探究方法であるが、運動する自然事象の探究においてはピュシコスな探究の基礎にある先なる方法ではあるが、主導的な役割を持ちえないことが含意されている。

同様に、『形而上学』N3で、永遠な存在に生成があるとすることは不条理であるとする議論のなかで、彼はピュシコースに語りうる対象の限界につい

て触れている。「彼らは宇宙を創作しピュシコースに語ろうとしているので、公正を期するなら、かれらの自然についての見解をなんらか吟味すべきだが、当面の探究から除く。というのも、今われわれが求めているのは不動なもののうちにある原理であるから」。(1091a18-21)彼は宇宙に生成がないとするピュタゴラス派のピュシコスな説明を吟味すべきだが、不動なものという研究対象の性格からして、自然学的な説明は不適切であり、「不生で一般に不動なもの」は「自然学とは別の、より先なる研究に一層属する」ことを明言している。これらのことはピュシコースという手法が適切に活躍できる領域が運動する質料を持った事物に関してであることを明瞭に示している。

他方、「ロギコース」とはさしあたり「プラトニスト的に」という歴史のなかで現われた抽象的な議論に終始する特定の思考様式として理解しうる。(eg. 1069a28, 1217b20f) この方法は『パイドン』のなかでプラトンがソクラテスの象徴的な探究方法の転換を告げる「第二の航海」にその一つの源泉を見い出すことができる。ソクラテスは「私には言葉 (τοῦς λόγους) へと逃れて、そのなかで、存在するものどもの真実を考察しなければならないと思われた」と述べ、自然研究への失望から、自然研究に対比される言論による探究への転向をを表白している。(Phaedo, 99e)「存在するものどもの真実」は所謂証拠よりも論により把握されるというものである。換言すれば、ソクラテスが求めている知識は感覚の集積に基づいたものによっては得られず、言論の力によってこそ得られるという信念の表明とも言える。

この見解はパルメニデスやメリッソスの論理主義にその源泉を遡ることができる。パルメニデスは「あるはある」また「あらぬはあらぬ」という同一性言明に固執し、そこから生成や消滅の否定に導く。あるがあらぬに成るのはドクサ(思い, 意見)の次元のことであり、真実にはあるはあるとしか言えず、生成と消滅はあるの次元のことではない。アリストテレスは先に見たように、ピュシコスな手法との対比においてこの流れを位置づけている。(298b17f) このように「ロギコース」は歴史的展開としてはパルメニデス、ソクラテスそしてプラトンの伝統の延長線上にあるものと理解することができる。

ここで興味深いことはプラトンの探究方法は「ディアレクティケー（哲学的問答法）」と呼ばれるものであったが、アリストテレスは彼等の方法を「ロギコース」と呼び直していることである。その理由は、彼がプロとコントラの議論を提示する問答の方法とその実践を「ディアレクティケー」と名付けたために、プラトンの哲学的探究を別の名前つまり「ロギコース」と呼び、自らの形式的言論による構築の手法の名前を適用せざるをえなかったからであると思われる。逆に言えば、彼はプラトンの一つの実践をこの名前で呼ぶことは、自らの方法がその連続線上にあることを承認していることを明らかにしている。

しかし、アリストテレスにおいては、ピュシコスな探究の適用範囲が運動する物体という分節の仕方では先行自然学者たちを継承するが、その根拠の探究が形相や目的因を包摂している点において先行自然学者たちの理解と同じではなかったと同様に、ロギコスな探究の理解もプラトニストとは異なる。彼はロギコースという手法が自然学的な探究において、自然学的に発見される対象の存在を要請ないし主張することができるものとして理解している。つまりロギコスな探究が自然学的な探究と相補的でありうると考えている。自然的対象はもちろん存在の一つの様式であり、存在の言語分析的探究の手法であるロギコースがそれに及ぶという点においてはプラトニストと重なるが、プラトニストは哲学的問答法により原理の知識に到達することができると考えている点において、またプラトニストはこの生成消滅する世界の知識は成立しないと考える点において、決定的に異なる。(Resp. 533a-537c) 換言すれば、彼らは存在の根拠として時空上特定できる質料因や始動因を探究の対象から排除せざるをえないのである。アリストテレスにおいてはロギコスな手法がこの現実世界の知識獲得に向かう重要な契機を提供する。⁽³²⁾

8 『自然学』『天体論』における無限の問題とロギコスな存在要請

アリストテレスは『自然学』Γ4-8において自然学の対象である無限の問題に取り組むさいに、これら二つの方法を明示して、どちらも同じ結論をもたらすものとして紹介している。Γ4の冒頭において、彼は「自然についての学は大きさ、運動そして時間を対象とし、それらのそれぞれは無限であるか有限であるかいずれかであること必然であるので、……自然の研究に従事する者には無限について、はたしてそれは存在するか、そしてもし存在するなら、それは何であるかを考察することが固有の仕事として属する」と述べ、自然学の諸対象における共通の問題として無限の存在とその何であるかを探究している。(202b30-36)

彼はまず無限は自存的な実体とするピュタゴラスそしてプラトンの主張を批判する。ピュタゴラスの徒は無限を実体であるとしながら、同時に分割しており不条理な主張をしているとされる。(204a33-35) 数学的对象や思惟的对象のような「なんら大きさ(μέγεθος)をもたないもの」(204b1)についての無限の探究は「あまりに一般的」(204a34)としたうえで、自然学の対象である「可感的事物(αἰσθητῶν)」の「増大の方向に」において無限な物体が存在するか否かを考察している。

彼はそこで、「無限なものが可感的事物には存在しない」という問題について、これら二つの方法から論拠を提示している。最初に彼は「無限な物体はロギコスに考察する人々には……存在しないと思われる」と述べる。(204b4-6) ロギコスな手法に基づく一つの議論によれば、無限な物体が存在しないことは、物体の共有見解としての説明言表である「いくつかの面によって限定されたもの」を受け入れると、無限な物体はその定義からしてありえないとして、矛盾に陥ることを許さない言論の力に基づき論じられている。(204b5-7) もう一つは、現実的に実現されている数の総体として無限の数は存在しえないことが論じられる。彼の議論を補うと次のような証明となる。

- (1)どんな現実的な数も数えうるものである。(自明なこととして)
- (2)数えうるものの総体をひとは数えることができる。(自明なこととして)
- (3)無限の総体を数えたということは無限を通過したということである。('数えた'の含意として)
- (4)定義により無限は通過しえないものである。(204a3f)
- (5)いかなる無限の総体も数えられえないことがない。((3)(4)による)
- (6)いかなる無限の総体も数えられえない。((2)(5)による)
- (7)現実的に数えられるいかなる総体も無限ではない。((1)(6)による) (204b7-10)⁽³³⁾

二つのロギコスな議論に共通することは物体と無限について「いかに語るべきか」という視点からの定義に基づき、言論上矛盾を回避するという仕方
で議論を導いていることである。ここで定義は直ちに提示されており、『分析
論後書』の探究論において展開されている論証を通じて得られているものでは
なく、ひとびとが「限定」や「通過」等について共通に持っている信念を
もとに共有見解として提示されている。ここで重要なことはロギコスな手法
から存在ないし非存在主張がなされるということである。そのことは、この
方法が単に言葉や概念の分析に終始するものではないということを示してい
る。

他方、彼は「ピュシコースに考察する人々には一層そうである」(204b10f)
と述べ、無限な物体は存在しないとする幾つかの論拠を提示している。(1)無
限の物体は元素の合成ではありえない。(204b11-22)なぜなら、物体の元素が
その多さにおいて有限(所謂四元素)であり、そのうちのいずれも量におい
て無限ではありえないから。というのも、物体は四元素の相互規定、均衡に
より生成するからである。(ちなみに、元素の数が一つだとする議論に対する
反論として、他の箇所でもピュシコースな手法が採用される。「ピュシコースに研
究しようとする人々は、最初の物体が不可分なものであると語ることはでき
ない」とする議論は、物体の「量に即して」また元素の多数性から「自然学
的に」と論じられている。(304a22-25)) (2)無限な物体は一つの単純なもので
はありえない。というのも、月下世界では元素以外単純物体は存在しないが、
四元素のうちいずれか、無限な元素として存在するとすれば、他の元素はそ
れによって滅ぼされていたであろうが、実際にそのようなことはないからで

ある。彼は「これらの諸元素は相互に反対の性質を持っている、例えば空気は寒く、水は湿り、火は暑い。それゆえ、これらのうちもし一つが無限であったなら、その他のものはすでに滅びてしまっているに違いない」と述べている。(204b26-29, cf. b22-205a7) ここでは自然学者エンペドクレスが根源物質として提唱し、アリストテレスが受け入れている四元素の諸特徴からして、無限な物体の非存在が主張されている。このことから、彼が自然学者の探究手法やその成果に則り、議論を展開する時は、その手法は「ピュシコース」であると考えていることが伺われる。

しかし、彼はΓ6において、Γ5におけるこれらの議論に基づきながらも、無限の存在を端的に否定することをしない。というのも、無限を無条件に存在しないとすれば、時間に始まりと終わりがあることになり、或る大きさを或る大きさに分割することができなくなり、また数が無限ではなくなる等「多くの不可能なことが帰結する」であろうからである。(206a9ff) 彼はそこでΓ5のロギコスそしてピュシコスな議論に則り無限の現実的な存在を否定しながらも、彼は新しく『自然学』A巻において導入し、B巻において展開している可能態、現実態の理論さらには、質料、形相の理論により無限を理解し、先行哲学者がかかえた無限についての諸アポリアの解決をはかっている。彼はΓ6以降において彼の存在理解から調停案を提供する。それは現実態および可能態という存在様式の区別に基づき、無限が或る意味では存在し、或る意味では存在しないというものである。

存在は一方可能態において、他方現実態において語られる、そして無限も一方では付加においてそして他方では分割においてある。しかし、大きさは現実態において無限でないことは語られた。[Γ5]しかし、分割によっては無限である。というのも、不可分な線を論駁することは難しくないからである。かくして、無限は可能態においてあることが残される。(206a14-18)

彼は無限をこのように「可能態においてある」ものとして捕え、そして「ある」が多くの仕方でも語られることから、「可能態においてある」も一義的ではないことに注意を促す(206a18ff)。「一日や競技がある」という場合に、一つが他のものの後に次々に常に生じることによってあるが、「オリンピック競技

は競技が生じうるという意味においても、またそれが生じているという意味においてもある」。(206a24f)つまり、次の競技が適切な時期に開かれるか確かではないとしても、それでも「オリンピック競技はある」と言うことは、存在の可能態の意味に取ることにより、正しい表現である。そのように、無限も可能態においてあるのは、一つが他のものの後に次々に常に生じることによって「ある」と言われうるそのようなものである。(206a21-23)従って、無限は「これは彫像でありうる」(206a19f)という類の可能態ではなく、「一般には、無限があるのは一つのものが常に他に取り込まれることによってある、そして取り込まれるものは常に有限なものであるが、常に他のものがある」(206a27-29)そのような仕方での可能的な存在のことである。これは「ある」の実際の現用言語の分析から、可能態における存在を分節し、無限の存在がどのように語られるべきかを、ロギコースに論じたものと言える。(cf. 207a33 *κατὰ λόγόν* 参照)彼はΓ4-8において無限についてピュシコースにそしてロギコースに探究を企て、無限の「何であるか」の自然学上の「知識」(208a28)を獲得したとみなしてる。(208a22-29, cf. 202b30-36)⁽³⁴⁾

アリストテレスは『天体論』A7において『自然学』のこの箇所に言及しつつ物体の無限の問題に取り組んでいるが、この著作はロギコースとピュシコースという方法的自覚のもとに議論が展開されており、二つの方法の理解に有益である。⁽³⁵⁾ 彼はこの著作において天体ないし宇宙に関して、それが一つであるのか多であるのか、連続的なものか空虚により分けられているものか、四元素とは別のアイテールが存在するのか等の天文学的な解明に務めている。宇宙という当時の科学技術においては直接的な観察素材の少ないものについては、言葉の力に頼らざるを得ない側面が強いという事情が、彼をして方法上の自覚を促し、A巻だけでも二つの方法に数度言及している由縁である。(eg. 274a19-25, a29, 275b13, 280a30-34, 282a14, 283b17-19)ここでは方法論の理解に焦点をあてるため、個々の議論の内容に対する解釈は最低限にとどめざるをえない。

アリストテレスはA2冒頭において「「一切」の自然について、それが大ききにおいて無限であるのか、その全体の嵩が限られているかは後に考察しな

ければならない。しかし、今、最初にわれわれは一切そのものの種類に即した諸部分について、すべての自然的物体と大きさは自体的に場所上動かされるものであるということから語ろう」と述べ、「一切」の理解のために元素という「諸部分」から探究を開始している。(268b11-15)そして、この「諸部分」の考察を通して、彼は四元素という部分以外に円運動する単純物体が存在することを論証する。

そのさい論点になるのは、物体は単純なものか合成されたものか、運動は直線か円か、上方か下方か、さらには自然本性に即したものか、反したものか、可滅か不滅か、完全か不完全かということである。この二分法による思考はそれぞれの組み合わせから矛盾律を盾にして、一つの結論を導出する企てである。四元素は自然本性上持つ諸性質例えば火や土の上下への直線運動をなす。これは、実際の火の運動の観察から原理として普遍化されたと思われる。四元素の混合は直線と円の混合した運動をなす。従って、円運動を自然本性上するものがあるとするれば、単純物体でなければならないが、四元素ではありえない。自然本性に反し円運動するものが永久であるとするのは「不可思議であり、不合理」であるからである。(269b2-9)さらに彼は円運動は直線運動より先であり、完全であるとする。「円運動は第一の運動でなければならない。なぜなら完全なものは自然本性上不完全なものより先であり、円運動は完全なものに属するからである」。(269a19f)この議論の背後にも、天体の円運動の完全性と月下世界の混合運動の不完全性の観察が背後にあると思われる。彼は「これらから明らかなことは、この地における〔四元素の〕合成とは別に、或る物的な実体が存在し、これらすべてよりもより神的でありまた先である」(269a30-32)とし「常に (ἀεί)」 「走る (θεῖν)」 第一の物体である「アイテール (αἰθέρα)」の存在が主張される。(270b20f)

アリストテレスは一切の「部分」であるアイテールの存在とその円運動の存在の主張に続き、A5において、「無限な物体が存在するか」を問う。(271b2) 彼はこの問題こそが「自然全体」について何らかの見解を持つ人々が意見に一致を見ないところであり、自然理解に大きな差異を生じさせる重要な問いであるとする。(271b13-17)

彼はそこで A5 および A6 においてこれまでの議論を振り返りながら、無限な物体が存在しないことを経験的にまた数学的に、やはり二分法に基づいて論じている。彼は A5 においては第一の単純物体が無限でないことを、A6 においては他の単純物体のいかなるものも無限でないことを証明している。

A5 における論拠は、すべての物体は単純か合成かどちらかであり、合成物体はその元素の総体より大きなものではありえないので、そのことは単純物体のいかなるものも無限ではありえないことを論証するのに十分であるというものである。(271b17-25, cf. A2. 268b26ff) 続いて、いかなる円運動をする物体も無限ではないことを六つの論拠により示しているが、その二つを挙げる。(1)第一に彼は円の性質と物体の運動の関係から帰謬法によりその不可能性を論じている。もし無限物体が円の軌道で回転するなら、その回転の中心から物体の境界への半径は無限でなければならない。もしそれらが無限であるなら、これらの半径の任意の二点間の空間は無限である。それ故に、その空間を横切るためには、物体は無限の距離を横切らねばならないが、それは不可能である。また彼は「われわれは現に天が円により回転しているのを見るし、また言論上も ($\tau\acute{\omega}\ \lambda\omicron\gamma\acute{\omega}$) 円運動が何ものかにあることを [A2. 269a20ff で] 説明した」(272a5-7) と観察上の事実と言論上の説得力に訴え、この議論を補強している。(271b28-272a7) (2)続いて彼は「天体が円運動をするのに有した時間は有限である」(272a16f) という一定の時間内に円運動する観察事実と、有限な時間の断片も有限であるということから、無限なものが円運動することができないことを補助線を用いて数学的に論じる。(272a7-20)

さらに A6 において、アリストテレスは他の単純物体のどれも無限ではありえないことを三つの論拠により証明する。(1)第一に、彼は元素の運動が中心に向かうものと離れていくものがあるという火や土の観察事実に基づいて論じる。元素例えば火や土は上方と下方への反対の運動をなし、反対の場所に向かう。そのさい「世界の中心は決まっており」、そこから下限そして下限と中心の間の空間双方が決まる。「というのも、沈んでいく物体はどこから下

へ向かって行こうと、中心を超えてそれより遠くへ行きえないからである」。それ故、この空間を占める物体は無限ではありえない。(273a7-21)

(2)第二に、彼は有限な重さと無限の重さの対比から論拠を提示する。無限の物体は無限の重さを持たねばならない。というのも、無限な物体の重さが有限であるなら、「有限な物体の重さと無限の物体の重さは等しい」という不合理なことが生じるからである。もし無限な物体の重さが有限であるなら、その重さが全体と等しい一つの部分を切り出すことが可能であろう。一部分を切り出してみよう。この重さは全体の重さに対し一定の比を担うであろう。無限からは有限の量を引き出すことができるので、その部分を十分な回数掛け合わせると、その重さが全体と等しいもとの物体の一つの部分を持つことになる。従って、無限な物体の重さは有限ではありえないことが明らかである。しかし無限の重さは不可能であるとすれば、「何か無限な物体の存在することも不可能である」。(273a21-b30)

続いて(3)彼は重さと速度の関係から無限の重さが不可能であることを論じている。諸物体はそれらの重さに比例した速度で動く。「或る重さのものが一定の距離を或る時間で動くならば、より重いものは同じ距離をより短い時間で動くであろう。……例えば、重さが半分のものがその一定の距離を或る時間で動くならば、全体の重さのものは半分の時間で動くであろう」。ガリレオの落体の法則を知らないアリストテレスは、例えば、石と鳥の羽が同じ場所から同時に落とされた場合の状況の観察から、このような理論化を試みているのであろう。そうすると、無限の物体は同時に、有限などの物体よりも早く動くであろうし、また全く動かない双方のものであろう。というのもそこにおいてそれが動く時間は無限に短くなければならないか、無時間でなければならないからであるが、これは不条理である。無限なものが動く特別な時間があると主張されるかもしれないが、「最小の時間というものはない」。それ故に無限の物体は存在しえない。(273a21-274a18)

これらの議論を彼は A7 の冒頭で次のようにまとめ、さらに新たな考察について述べている。

かくして、無限な物体が存在しないことは、個々の場合を介してこの仕方[A5—6]

研究する (θεωροῦσι) ことによって明らかである。だが、さらに、それは単に、原理についての論考 [『自然学』Γ4-8] のなかでわれわれにより語られた諸言論に即して (κατὰ τοὺς λόγους) だけではなく、(というのもそこでも無限について、はたしていかに存在しまたいかに存在しないかが普遍的に説明されたから)、今別の仕方、普遍的に考察する (καθόλου σκοποῦμενοις) ことによっても明らかである。……まずわれわれは無限について普遍的に語ろう。(274a19-29)

彼はここで「個々の場合を介してこの仕方」が「ピュシコース」を、「普遍的に」が「ロギコース」を表わすとは明言していない。無限な物体の存在という困難な問題を前にして、A5-6においては元素を個々に「この仕方」で分析したのに対し、A7以降においては「普遍的に語る」ということだけが言われている。しかし、後に普遍的に議論するなかで、或るものが「ロギコーテロン (より一層形式言論構築術的)」と呼ばれている。(275b12) このことは少なくとも「普遍的に語る」ことの或るタイプはロギコスな議論でありうることを明確に示している。他方、彼は A5-6 において四元素およびアイテールという「一切」の部分について、それらの自然本性的な運動つまり前者においては直線、後者においては円運動が無限ではないことを論じた。彼はここで A5-6 の議論の仕方と二つの方法が明言されている『自然学』Γ4-8 の議論との親近性について触れている。A5-6 は、見てきたように、しばしば観察事実を引用し、そこから推論を組み立てているが、補助線による数学的証明や帰謬法による論理的証明も豊富に用いており、ピュシコースとロギコース双方の手法を用いてなされていると言えよう。A7以降の議論に「ロギコーテロン」という表現を見い出すことができることは、「ロギコス」な議論が比較を受け入れるものであり、無限の存在という単にピュシコースにだけ探究されえない困難な問題に対するアクセスとして、さまざまな程度を許すロギコスな議論を用いている状況を反映している。何故これら二つの術語がこの箇所でも用いられなかったかと言えば、無限をめぐる元素を個々に論じることと普遍的に論じることの対比がここでは明らかにされているだけで、そこで採用されているロギコスな議論に程度があることから、『自然学』におけるほど、明確な方法上の差異を自覚できなかったことが推測される。

ここで、彼が A7 において試みようとしている、無限について「普遍的に考

察する」ことが実際どのようなものであるかを確認しなければならない。彼はそこで四つの論拠を挙げるが、他の三つの企てよりも、四番目の論拠について「次のように証明を企てることはロギコーテロン（より一層形式言論構築術的）である」（275b12）と明言されていることから、これらの論じ方がロギコースであると言える。ここでの議論の特徴は無限な物体を異質的なものと同質的なものに分けて論じていることである。「異」と「同」はプラトンの『ソピステス』（253cff）に見られるように、存在の分類においてきわめて形式的、普遍的な分類項目である。⁽³⁶⁾

第一番目の論拠は次のものである。(1)最初に、彼は異質な無限の物体は不可能である、というのも、(a)それは元素の運動の種類は有限であるために元素の無限の変異から構成されえないからであり、(b)それは、諸元素それら自身が大きさにおいて無限であるものからは構成されえないからであると、論じている。(274a30-b22)(2)続いて、彼は、同質的な無限の物体は、それが重くても、軽くても、また自然な円運動を持つにしても、存在することが不可能であることを、A5—6の先行議論に言及することにより論じている。(274b22-32)(3)第三に、彼は無限な物体は有限な物体そして無限な物体との関連で、作用をおよぼすことも、作用を受けることもありえないことを論じる。「能動」と「受動」という運動の分類も火の上昇という類の運動よりも一般的であると言うべきであろう。

そのうえで「ロギコーテロン」な第四の論拠が挙げられる。「無限な物体が、同質的である場合、(a)円運動することはできない。なぜなら、無限なものには中心がないが、円運動するものは中心をめぐるって動くからである。しかしまた、無限な物体は直線的に動くこともできない。というのも、そこへと自然に即して (*κατὰ φύσιν*) 動いて行くところの、無限な物体とは異なった、無限な大きさの場所と、また、自然に反して (*παρὰ φύσιν*) 動いて行くところの、別の無限な場所が要請されるであろう (*δεήσει*) からである」。(275b12-18) これが今までの議論よりロギコーテロンであるのは、「円」と「直線」の定義上の理解から、無限な同質的な物体の円と直線の運動の不可能性を論じているためである。円には中心があるが、無限にはありえない、それ故に円

運動はできない。次に、自然に即した運動と反する直線運動は反対方向である。二つの方向に二つの無限の空間が要請されるが、無限とは限りのないものである以上、二つ存在することはありえない。さらに、彼は「(b)無限が自然によって直線運動を持つのであれ、自然に反して動かされるのであれ、双方の場合に動かす力は無限であることが要請されるであろう(δεῖσθαι)。というのも、無限な力は無限な物体の持つ力であり、また無限な物体の力は無限だからである」と述べる。(275b18-21) これは(a)と同じ状況でそれらの運動を引き起こす力に注目し、言葉の上で有限な力は有限な距離しか動かせないという現実世界における反対状況の想定のもとに、無限な物体を無限な空間にわたり動かす力は無限でなければならないことになると論じるものである。しかし、その力を持つものは動かすものであるとして、自らを動かすのであれば、定義上靈魂を持ったものになるし、無限な生物は考えられない。他方、無限に動かすものと動かされるものが二つあるなら、二つの無限が存在するという、やはり矛盾した帰結になるであろう。

(a)(b)において「要請する(δεῖν)」という語が用いられていることはロギコスな議論を特徴づけている。これは、論証により導かれる「必然」という表現とは異なり、無限な物体の運動とそれを動かす力さらにはその力を持つ動かすものに関する議論の導き上、無限の空間と力を持つもののふたつが存在することが要請され、二つの無限なものは定義上矛盾するとして退けられている。

以上が「ロギコーテロン」な証明の企てであるが、特徴は共有見解として持っている直線、円、運動、力、動かすものと動かされるもの、さらには自然に即してと反自然ないし強制によってということの理解から、複数の無限の存在を議論の上で要請し、その不可能性を論じる手法である。帰謬法がここで用いられるように、これは論理規則に則り存在、非存在主張を形式言論上構築していく手法である。

『天体論』A 巻においてさらに二箇所、方法論の理解に有益な記述を見い出すことができる。彼は、A10において、或るひとびとの、宇宙は生成したがその後滅びることなく永遠であるとする見解を挙げ、それは不可能であると

している。それが不可能である理由は次のものである。「われわれが多くの或いはすべての場合について成り立っていると観察している (*ὁρῶμεν*) 限りのものだけを、措定すべきということは道理にかなっているが、これについては反対のことが帰結するからである。というのも生成するものはすべてまた、消滅しているように見えるからである」。(279b18-21) このように、自然学上の理論は常に或るいは多くの場合に観察事実に基づいて構築され、それに適合するものでなければならないことが言及されている。アリストテレスはこの問題を A10 の結論部において、「われわれは宇宙に関する点についてのみ、これまで、ピュシコースに〔自然学上〕論じてきたが、あらゆる場合について普遍的に考察してみれば、このことについても明らかになるであろう」(280a32-34) と述べ、宇宙の生成と消滅について自然学的な考察に続いて、生成と消滅一般の普遍的な検討に移っている。

A11 におけるその普遍的な検討の仕方とは生成と消滅さらには可能と不可能についての語意の分節である。「いかにわれわれが「生成しないもの」と「生成するもの」また「消滅するもの」と「消滅しないもの」を語るかをまず分節しなければならない」。なぜ語義分析をするかと言えば、たとえ何も議論に差異をもたらさないにしても、ひとが多くの仕方でも語られるものを分節されないものとして用いるなら、「思考が曖昧なものとならざるをえない」からである。(280b1-5) ここで、「普遍的に考察すること」は「いかに語るべきか」という手法である「ロギコース」と同じもの、ないし近似なものとして語られている。

一例として「生成しないもの」がどれだけの仕方でも語られるかを挙げてみよう。(1)或るものが以前には存在していなかったが、生成や転化の過程なしに現に存在している場合。(2)或るものが、生成可能であるが、現に存在しない場合。(3)或る時には存在するが、或る時には存在しないということに決して成ることが「できない」ものの場合。成ることが「できない」には二義があり、(3a) 成るであろうと語ることが真実ではないという意味の場合と、(3b) 容易に、速やかに、または成るべき仕方では成ることができないという意味の場合。(280b6-14)

このようにして、アリストテレスは A11—12 において「生成」と「消滅」、
「存在」と「非存在」を「可能」と「不可能」の語義の分析とその組み合わせ
において、普遍的に検討し、次のように結論づけている。「また、普遍的にで
はなく、ピュシコースに（自然学上）考察しても、以前には永遠に存在して
いたものが、後に消滅したり、或るいは、以前には存在していなかったもの
が、後には永遠的なものであるということは不可能であることがわかる」。
(283b17-19)

以上のように「不可分割的な大きさの存在」や「無限に大きな物体の存在」
さらには「永遠な宇宙の存在」というカントのアンティノミーの項目になっ
ている自然学上の問題は、どんなに観察を重視しても決定的な検証を与える
ことはできないものであり、言論の力に訴えざるをえないものであると言え
る。このような文脈においては形式言論上の議論はその役割を発揮し、自然
学的探究と相補的である。

9 ロギコスな推論の評価

これに反し、月下世界の生物現象は生命という固有の困難な問題を抱えて
いるが、観察によるデータの蓄積から理論を構築することがより容易である。
次に、その文脈において二つの方法論がどのように比較されているかを検討
する。

彼は『動物発生論』B8 において、なぜ半ロバつまりラバが生殖不能である
のかを探究する、その文脈において「ロギケーな論証 (λογική ἀπόδειξις)」
(747b28) について言及している。⁽³⁷⁾ 最初にエンペドクレス等先人たちの、精
子の軟かさや、子宮の損傷に訴えた説明を紹介し、その欠陥を指摘する。そ
の後に、彼は一つのロギケーな論証を提示しているが、新奇な表現であるた
めか、その規定を行っている。「恐らく、ロギケーな論証のほうが、言われて
きたものどもより説得力を持つと思われるかもしれない。私が「ロギケーな
[論証]」と言うのは、論証が普遍的であればあるほど、それは固有の原理か
ら一層遠ざかっているということの故にである」。(747b28-30) この一文から

分かるように、多様な論証様式が考えられるなかで、固有原理から遠ざかり、一層普遍的な諸命題からなる類の形式言論構築術的な論証を、科学的な知識をもたらす本来的な論証と対比すべく、「ロギケー」と形容されている。ここでこの形容詞の付加による強調が、論証を構成する命題の型が普遍的なものであるということを表現するためにか、それとも論証としての非本来性つまり、「ロギケー」そのものに否定的なニュアンスをもたさせるためのものは直ちには判明しない。そこで挙げられる一つの具体的なロギケーな論証の事例を参照して判断することにしよう。

そこでの議論の仕方は、条件文で一般的な対立命題つまり、(1)同種の雌雄からはそれらと同種の雌雄が生まれ、(2)異種の雌雄からはそれらとは異種の雌雄が生まれることを提示し、「もし(1)(2)であるなら……」という仮定から、次のように論じる。

〔論拠 p〕種において相互に差異のない雌雄のラバが生まれるが、一頭のラバは馬とロバから生まれ、それら(馬とロバ)とラバは種において異なるので、〔結論〕ラバ同士から生まれることは不可能である。というのも、(a)いかなる異なる種類も、[(1)の故に] 同種の雄と雌からは種において同じものが生まれる故に、生まれえないからであるが、しかし(b)ラバが生まれることができるのは、種において異なっている馬とロバからラバは生まれ、そして [(2)の故に] 種において異なるものどもからは、種において異なる動物が生まれると前提されていたからである。(747b35-748a7)

この議論に対しただちに、ラバ同士の生殖の可能性として、(1)によりラバ同士からは、いかなる異なった種類の動物も生まれえないことを認めるにしても、ラバ同士からラバが生まれることは(1)により可能なのではないかという疑義が出されよう。しかし、この議論は条件文の双方(1)(2)を認め、ラバ同士からラバが生まれえないことの理由は〔論拠 p〕によりラバが異なる種同士から生まれたことであるとされている。そしてこの〔論拠 p〕を支える理由として、(a)(b)が提示されているが、これらは(1)(2)の適用を限定すべく機能している。同種 xx から同種 x が生まれ [(1)により]、異種 y は生まれえない [(a)により]。異種 xy から異種 z が生まれる [(2)により] が、(2)の議論の適用範囲においては、同種という種類は存在しないので、同種は生まれえない。つまり、[(b)により] 異種から生まれた異種同士 zz は同種であるので、[(1)により] そ

れからは同種 z が生まれる、というわけにはいかない。というのも、 z はそれぞれ xy という異種によるから、(1)の意味での同種ではないからである。これが「ロギケーな論証」の一例とされているものである。

これは「同」からは「同」, 「異」からは「異」という一般的な議論を生物事象に歪曲して適用を試みた論証と言えよう。アリストテレスはこの種の議論に対し、次の評価をくだしている。

この普遍的な言論 (*ὁ λόγος καθόλου*) は無益で空虚である。というのも、固有な原理に基づかない言論は空虚であり、諸事象についてありはしないのに、あるように思われているからである。現に幾何学的原理に基づき幾何学的論拠があるように、他のものどもについても同様である。空虚なものは何ものであるように思えても、何ものでもないのである。今の説は真実でもない、というのも同種でないものどもから生まれた多くのものどもに生殖が起こるからである。従って、他のものどもについても、自然学的なものどもについても、この仕方では探究すべきではなく、むしろ馬とロバの類に属するものどもを研究することから、ひとは一層根拠を把握することができる。(748a7-16)

この箇所は、しばしば、いかにロギコスな探究様式が、自然研究さらには他の研究においても、無益で空虚なものであるかの根拠として提示されてきた。⁽³⁸⁾ しかし、このケースにおいてはあくまで「論証」能力が比較されている。ここでは、「ロギケーな論証」が「固有な原理に基づく」幾何学やその他の諸学問の論証に比較され、無益であり、空虚であるとされている。しかし、同と異という類の一般的な用語による言論の力により論じること自体が否定されているのではない。普遍的な言明に関わる「ロギケー」という表現それ自体が否定されているのではなく、ここでは「今の説」と呼ばれている見解を主張した或るひとびとが「真実ではなく」誤って展開した、一つの具体的な「普遍的な言論」の論証力が否定されている。この生物学の一ケースにおいて、アカデメイアにおいて流布していた論証の手法を用いることが否定されている。論証理論の展開として見れば、アリストテレスは個別科学において知識をもたらす理論を、このロギコスな論証の克服として考案したとも言えよう。

実際、『分析論後書』においてアリストテレスはアカデメイアにおいて企てられていた「何であるかの推論」が「知識をもたらす推論」(71b18) である

「論証」としての条件を満たさないとするが、そのような推論を B8 において「何であるかのロギコスな推論 (λογικὸς συλλογισμός)」と呼んでいる。(93a15) そして、この推論が持つ諸困難の克服として探究論の文脈において新たな推論の形態を考察している。彼は次のようにこの推論についてコメントしている。

一つの様式は今 [B4 で] 吟味されたものであり、何であるかを他の何であるかを通じて証明するものである。というのも、何であるかについては、中項は何であるかであり、また固有性については中項は固有性であること必然だからである。従って、同一の事物にとっての本質については、一方は証明し、他方は証明しないということになるであろう。かくしてこの様式は論証ではないであろうことは先に [B4 で] 語られた。これは何であるかのロギコスな推論である。(93a9-15)

この様式は一見道理あるもののように思われよう。前提が何であるかを明らかにするものではない命題が、結論として何であるかを明らかにすることはできないと思われるからである。固有性や本質についても同様であろう。何であるかにより何であるかを証明する試みの一つは B4 においてクセノクラテスに帰せられる「靈魂」の何であるかの推論にみられる。「靈魂」を小項とし、「それ自身が自らにとって生きることの根拠である」を中項とし「自らが自らを動かす数である」を大項とした推論においては、靈魂の何であるかを前提においてすでに、「同じものであるという仕方で要求している」。(91a35-91b1) つまり、小項と大項の連関である結論は、すでに前提において、靈魂があることの中項に生の根拠を持ってきても、中項は実は大項であるので、靈魂にとって同一であるものを要求していることになる。この推論は、すべての項が単純換位され、さらに「第一かつ無中項の二つの前提命題」(91a33f) から構成されており、それぞれが自体的同一性としての本質を表現するものである。これは、推論としては成立しているが、論点先取を犯しており論証ではない。

この種の推論がなぜ「ロギコス」と呼ばれるかという問いに対しては、最も安全な応答は、それが先の引用において論証と対比されていることから、知識をもたらず論証と区別するためであるというものであろう。しかし、これは一般的にすぎよう。この推論の実質が論じられる B4 においては、「何で

あるか」、「固有性」、「何であるかにおいて述語となるもの」さらには「本質」という弁証術の術語をめぐって議論が展開されていることから、これは「弁証術的推論」であると通常理解される。⁽³⁹⁾しかし、*διαλεκτικώς*とは言われていないこと、さらに論証言語と言える「第一かつ無中項の前提命題」からこの推論が構成されると言われ、それが共有見解として得られているものだと言われていないことも、この理解に疑問の余地を残す。これらの反論に対し、従来の立場から、学の第一原理に関する同一性命題は論証できないが、弁証術的なルートは第一原理に対し開拓されうるし、無中項の命題であってもそれを共有見解とすることはできると応答するであろう。(cf. 89a2-4)しかし、これは何であるかの推論の一種類であり、それが論点先取を犯している推論である。『トピカ』で展開された弁証術的推論が常に論点先取を犯すとは限らないことを考慮すると、アリストテレスは弁証術的推論とは別の推論を念頭に置いていると思われる。

私はこの推論が「ロギコス」と呼ばれているのは、何であるかからは何であるかが、固有性からは固有性が、そして本質からは本質が証明されるという、同一性言明による形式的な論証を企てているためであると解する。ここでも先のラバの生殖不能性の論拠のように、「同」をめぐって、「同」から「同」を導出する形式的な議論が「ロギコス」と呼ばれている。ただし、ここでは一般的な存在分析におけるプレディカビリアの次元で区分される同一性言明が問題になっており、生物種より一般的な次元における議論の枠組みである。この推論は論点先取を犯した劣った議論であるが故に「ロギコス」なのではない。確かに、クセノクラテスの同一性言明から形成される推論は、存在分析の誤った適用つまり一つの推論における同一言明の二度の使用のために、結果として論点先取を犯している。そのためそれは論証的な知識を形成できない。しかし、ロギコスであることはプレディカビリアの区分に基づいた同一性言明による推論の形容として用いられている。なお、この推論は論証から定義が形成されるべきであるのに、定義の或る理解のもとに論証を企てており、彼がめざす探究論の道具としては機能しないそのような推論である。彼はアカデメイアの同僚たちのロギコスな企てをこのような欠陥ある

ものとして提示し、この推論に代わる、論証的知識をもたらす何であるかの推論の形態の考察を「われわれは、再び、はじめから語ることによって、いかなる仕方で、[何であるかの推論が]ありうるかを語ろう」と述べ、新たに展開している。(93a15f)

以上、同僚たちは誤った文脈において誤った仕方でもギコスな推論を適用していることが明らかとなった。先のラバの生殖不能のケースと同様に、「靈魂」の「何であるかのギコスな推論」も、「同」をめぐる形式的な議論から構成されており、個別科学における知識をもたらす推論とはみなされない。論証科学構築の道具としては、ギコスな推論は力を発揮することができないことが明確にされている。つまり、個別諸科学において知識をもたらす論証条件を満たすことができないという点において先のように誤って提示されたギコスな推論や議論は無効であり、彼の新しい論証理論により乗り越えられているが、「ギコス」という形容が否定的に用いられているのではないこと、またあらゆる局面において形式言論構築術的な議論が否定されているのではないことは留意を要する。

『形而上学』N1において、プラトニストが事物の構成原理として種々の反対なものを挙げている文脈において、「形式言論構築術的な論証 (λογικὰς ἀποδείξεις)」に言及されている箇所は、その論証自体に何ら否定的な含意はない。(1087b21) 或る人々は大と小や多と少等に共通する普遍的なものとしての「超過と被超過」を構成要素であると主張している。しかし、大と小や多と少を原理とするものであれ、それらより普遍的である超過と被超過を原理と主張しても、「これらの諸説のあいだには、帰結するものどものいくつかに関して、言わば、何らの相違もなく、ただ、形式言論構築術上の困難だけがあり、彼等はそれらを形式言論構築術的な論証を提示することによって回避している」とされる。(1087b18-21) ここでは、諸原理としてより具体的な反対物が挙げられるさいにも、普遍的なものが挙げられる場合においても、「同じ論理」(1087b22)が妥当し、それぞれの原理にまつわる形式的な困難について、形式的に処理されている。

『形而上学』A1において、アリストテレスは「現代の或る人々」と「いに

しえの或る人々」という仕方ではプラトニストと自然学者を対比し、プラトニストについて「現代の或る人々は普遍を一層実体であるとしている。というのも彼らはロギコースに探究することを通じて普遍的な類が原理であり実体であると主張しているからである」と述べている。(1069a26-28) ここでプラトニストの手法がロギコースに探究することにより普遍的なものを実体であるとしていることが明言され、他方自然学者たちは土や火という個々のものをピュシコースに探究することにより実体であるとみなしていることが含意されている。「ロギケー」という形容詞自体さらに「ロギコース」という副詞自体には何ら否定的な意味あいもここにも見い出せない。アカデメイアにおける何であるかの探究という実践の文脈において、あらゆる対象をロギコースにのみ論じることが批判されているのであり、とりわけ個別科学の領域において、学問的知識をもたらしものとして提示される時、ロギコスな企てを個別科学の文脈においてなす論証者が批判されている。なお、これらの議論からアカデメイアにおける言論による探究がロギコスであると形容されていることが分かる。

ロギコスな手法そのものは積極的に評価される局面も持っている。以下、その手法が積極的に評価される文脈を見ておこう。

『エウデモス倫理学』A8においては、アリストテレスは「最善のものとは何であり、どれほどの仕方では語られるかを考察しなければならない」(1217b1)として、善それ自体としてのアイデアの諸性質を検討する文脈において、次のように述べている。

しかし、この見解[アイデア論]について詳しく考察することは[倫理学以外の]他の研究(διατριβή)に属し、また多くのものは必然的にロギコテラスな(より一層形式言論構築術的な)研究に属している。というのも、同時に反駁的であり、かつ共通な議論(οἱ ἅμα ἀναίρετικοί τε καὶ κοινοὶ λόγοι)は他のいかなる学問に即してもありえないからである。しかし、もしこれらについて簡潔に言わねばならないとすれば、次のように言おう。まず第一に、善のアイデアのみならず何であれ他のアイデアについても、アイデアがあることはロギコースにそして空虚に(λογικῶς καὶ κενῶς)語られるとわれわれは言う。それ自身については民間の諸議論においてもまた哲学における諸議論においても、多くの仕方では考察されてきた。続いて、もし諸アイデアと善のアイデアがとりわけ存在しているにしても、善き人生と実践のためになんら有益では

ない。というのも、善は多くの仕方で語られまた存在と同じだけ語られるからである。
(1217b16-27)

アイデア論を扱うこの箇所において「ロギケー」の比較級と副詞形に出会う。倫理学より一層ロギケーなものを表現すべく、比較級が用いられるが、これが女性形であるのは「研究」を形容するためである。そしてこの研究は反駁的であると同時に共通な議論に同時に従事するものであるとされる。これは先に『トピカ』において見た、ロギカイな命題は「弁証術的にドクサ（意見、見解）に」（105b30f）において用いられることもあれば、また「真理に即して哲学に」において用いられることもあることに、さらには吟味検証の術である弁証術も哲学も共に「存在がそれらすべてについて共通する、あらゆるものについて議論する」（1004b19f）ものとされていたことに符号する。弁証術と哲学双方に関わりうるロギコーテラスな研究は定まった名前を持たない広い活動であるためか、単数形で *διατριβή* という、その語義として「研究」の他により原意に近いものとして「時を費やす」、「楽しむ」等の一般的な意味をも持つ語が選ばれていると考えられる。これら二つの実践に名前をつけるとすれば「普遍学」というものになろう。実際には、アリストテレスは存在である限りの存在を研究する第一哲学に即して、善と存在が多くの仕方で語られるということに注意を促し、彼の存在論からアイデア論の反駁を試みている。
(1217b25ff)

なお、彼はアイデアの存在はプラトニストたちにより「ロギコースにそして空虚に」語られていることを指摘しているが、ここでも方法表現する副詞形がそれ自身として軽蔑的な含意を持つかが問われよう。アイデア論を「詳しく考察する (*διασκοπεῖν*)」ことが「ロギコーテラスな研究」に属するとした上で、ロギコースに語られていることを否定するとは考えにくい。アイデアの存在を語ることはロギコースにであれ、他のいかなる仕方においてであれ、空虚に語ることでであると主張されていると解する。彼等は自分たちの本来的な議論の方法としてロギコースという手法を採用するが、それによりアイデアの存在を語ることが空虚なのであって、ロギコースという手法が否定されたり、軽蔑されているわけではない。アイデアをめぐる普遍的な術語を用いて思

考することは、どんな方法においてであれ空虚なことである。彼は『分析論後書』において論証における述定様式をめぐり、白は何かについてあり、白それ自体であるのではないという議論の文脈において、「アイデア (εἰδῆ) よさようなら。それらは無意味なさえずりであり、たとえ存在するにしても、当面の議論に無関係なのだから」と述べている。(83a33f) このアイデア論批判はここでの善についての議論と同じ論調であり、たとえアイデアが存在するにしても、善を説明するのに役に立たない以上、アイデアについてどんな仕方においてであれ語ることは空虚であり、無益であるとされる。これは先に見たラバの不妊をエンペドクレスがピュシコースに子宮の損傷に訴えて説明したが、誤っていたことと類比的である。それは「ピュシコースにそして誤って」と形容されるべき事柄である。

さらに、倫理学よりも「ロギコーテラスな研究」は『形而上学』M5 におけるアイデア論批判に見られる。彼は M5 において、まず(1)アイデアが生成消滅する感覚的な事物を説明するうえで役に立たないことを指摘している。(1a)アイデアはこれらの事物の運動や転化の根拠たりえないこと、また (1b) アイデアはそれ自身として事物に内在せず、アリストテレスが提示する実体の条件を満たさないために、事物の認識にも存在にも無益であるとされる。(1079b14-18) 続いて、彼は(2)諸事物がアイデアを範型とする考えが困難をかかえることを指摘している。「範型が存在し、他の諸事物はこれらに分有すると語るとは空虚を語ること (κενολογεῖν) であり詩的な比喩を語ることである」(1079b24-26) と言われる。アイデア論は詩的な比喩にすぎないことの理由としては (2a) 誰がアイデアを眺めつつ作るのか、(2b) 現実には模写せずにも、事物は存在し生成することができるではないか、(2c) 同じ一つのものが部分を持つとして、それらの多くの範型が同一物にあることになる、さらに (2d) アイデアは感覚事物の範型の範型になってしまう等の困難が指摘されている。(1079b23-35)

これらの議論を受けて、M5 の結論として、アリストテレスは「アイデアについてはこの仕方でも、またロギコーテローンでそしてより正確な議論を通じて、ここで研究されたことどもと同様の多くの反論を集めることができる」

と述べている。(1080a9-11) 範型一模造モデルが持つ諸困難をさらに「ロギコーテローン(より一層形式言論構築術的)でそしてより正確な議論を通じて」指摘できるとするが、具体的には M5 において触れられなかった、多くのアイデアから一つのアイデアができるとされるさいの一ないし単位の問題、つまり「多」と「一」が相互にどのような関係にあるのか等の議論が想定されよう。(eg. *Met.* A9) ここで興味深いことは「より一層ロギコスでそしてより正確な」という組み合わせが見られることである。「ロギコースにそして空虚に」という組み合わせは、見てきたように、プラトニストのアイデアを論じる仕方がロギコースであり、そしてそれは善の解明の文脈においてアイデアを論じるが故に空虚であった。それに対し、「より一層ロギコスでそしてより正確な」はどちらも比較級の表現であることは、この連言は先の事實的、歴史的な連言に比べ、「より一層ロギコス」であることを形容するものとして「より一層正確な」が結ばれていると理解すべきことを示している。

ロギコスは厳密なものであるという理解を支持するもう一つの箇所を指摘しておこう。『分析論後書』A24 において、原理に一層近いものに基づく論証が、より近くないものに基づく論証より「一層厳密」とであるとされる文脈において、普遍的な論証は原理に近いという特徴をもつことから、「普遍的な論証は一層優れている」と言われる。(86a15-19) この議論に続いて、彼は「語られたものの或るものどもはロギカである。最も明らかなことであるが、普遍的な論証が一層主要であるのは、前提命題のうちより先なるものを把握することにより、われわれは或る意味でより後なるものを知っている、つまり可能的に知っているからである」と述べている。(86a22-25) ここでも普遍的な論証はロギカイなものであり、より一層厳密なものであるとされている。ただし、ここでの普遍は個別諸科学のなかで、外延を等しくする普遍のことであり、プレディカビリヤや範疇の次元での普遍のことではない。例えば、「等辺三角形が二直角を持つ」ことを知ることよりも、「三角形が二直角を持つ」ことを知ることのほうが優れている。(86a25-30) 以上から「ロギコス」や「ロギコース」がそれ自身として否定的なニュアンスを持つものでないこと、むしろより厳密な学を構築しうるものであることが明らかにされたこと

としよう。この手法が批判される文脈はアカデメイアのひとびとが個別科学の対象に対して、この議論を論証として提示する場合である。そこでも「ロギコス」という形容それ自体が軽蔑されているのではなく、それが誤った文脈においてそして誤った仕方でも適用されることが批判されていることが明らかにされたとしよう。「ロギコス」や「ロギコース」という概念それ自体には何ら否定的な含意を持つてはいないことが明らかにされたこととしよう。

10 「アナリュティコース」の基礎

ここで、「ロギコース」と「アナリュティコース（分析論上）」が対比されている文脈を検討する。Charles は先の二つの方法と「分析的」方法の三つの関係は次のものであるとしている。「アリストテレスは『分析論後書』A22.84a7f において「論理的 (logical)」を「分析的 (analytical)」から区別している。そこでは「分析的」は論証の理論から引き出される素材を召集する。(84a10ff) 「分析的」は「論理的」そして「自然的」から区別されうる。というのも、それは（「論理的」とは異なり）説明に関わるが、しかし（「自然的」とは異なり）個々の主題領域の詳細に固有な説明とは関わらないからである」。ここで Charles はギリシア語の *λογικός* を英語でそのまま *logical* と訳するが、彼は『トピカ』は最も一般的（「論理的」）な概念に関わる」とするように、*logical* によって「一般的 (general)」という事態を念頭に置いている。⁽⁴⁰⁾ 重要なことは「ロギコース」な手法が分割法等の難点を克服する論証理論によって初めて明らかにされる「根拠」に対してどのようなアクセスを持ちうるのかということである。ロギコースという手法は、Charles が言うように、論証が説明によりもたらす根拠の開示にはなんら関わりえないのであろうか。

ここで、『分析論後書』A22 において、ロギコースとアナリュティコースに論証の述語系列の無限性の否定がなされている箇所を検討する。(82b35, 84a7, 84b2) ロギコースには二つの証明が試みられる。一つは定義の可能性から導出されるものであり (82b37-83b31), もう一つは推論による知識の可能性

から導出されるものである。(83b32-84a6)第一の論拠の提示において、『トピカ』における弁証術のトポス論の用語である、「何であるかにおいて述語となるものども」と「本質」を用いて、その述語系列が停止することを論じている。(cf. 102a18, a32)

ロギコースに研究する人々には次のように明らかである。一方、何であるかにおいて述語となるものどもについて、[述語系列の停止は]明らかである。というのも、本質が定義されうるのであれば、或るいは知られうるものであれば、他方、無限を通過することができないならば、何であるかにおいて述語となるものどもは限られること必然である。(82b35-83a1)

これは本質の定義可能性の仮定から、述定の遡及における停止の必然性を導出している。これが何故ロギコスな研究かと言えば、一つには「本質」とは現実世界においてピュシコースにそれを具現するものが探究されるべきであるが、その語は自体的同一性を意味し、何であれそれ自体として語られるものに適用される一般的な用語だからであり、もし何であれ探究対象の本質が定義されうるなら、述語づけは無限ではないことを一般的に論じうるからである。

さらに、「われわれは普遍的に語る」(83a1)として、ロギコースに議論が続けられ、本来的或るいは端的な述語づけは、「白いものは木材である」というものではなく、「木材は白い」というように、属性がそれに属する基体が主語の位置をしめて述定されるべきであると「規則化しなければならない」(83a14)とされる。これは実体と属性の区別をするカテゴリー論を前提にした述定の形式を提示したものと言える。(81a1-35)そこでも、本来的述定の主語となる実体について、「実体を意味表示するものどもは、それについてそれらが述語づけられるまさにかのもの、或るいはまさにかのものであることを意味表示する」(83a24f)と語られる時、『トピカ』においてなされたブレディカビリアの二種である本質と類の区別に基づいている。(cf. 141a35, 135a10ff) ロギコースという手法が『範疇論』や『トピカ』で展開される存在をめぐる一般的な言語分析に基づいていることがここでも確認される。

他方、「アナリュティコース」という手法の理解は、この述語系列の停止に

関する議論から得られる。そこでは「ロギコース」な論拠の提示は、「アナリュティコース」な手法と対比されているが、双方において述語系列の無限遡及はないとされる。

さて、ロギコースには以上のことから、ひとは語られたことについて納得するでもあろうが、しかし、アナリュティコースには、考察の対象である論証科学において述語となるものが上方にも下方にも無限ではないことは、次のことどもの故に、より簡潔に明らかになるであろう。即ち、論証は事物に自体的に属する限りのものどもについてある。(84a7-11)

ここから「アナリュティコース」とは、考察の対象が論証科学に関わり、そのなかで論証言語による一つの思考様式のことであることが伺われる。同じ結論に到達しうが、二つの方法が峻別されている事実は「ロギコース」が論証科学の次元において根拠を根拠として開示する論証言語とは異なる次元で活動することを明らかにしている。さらにアナリュティコースとロギコースという手法との関連がここから明らかになる。論証の持つ述語づけの形式化の議論も規範力を伴ってロギコースに言われるものであることは、論証も言語実践であり、科学的知識をもたらす厳密な実践も普遍的な言語規則のもとに形成されることを示している。論証言語の基礎に規範的な言論力を持ったロギコースという手法が機能している。

なお「アナリュティコース」という語は、他の語例えば、「論証上」(ἀποδεικτικῶς)により代用されている。(75a12, 1418a38) この語も「ロギコース」と対立するというよりは、議論の対象を論証科学における自体的述語づけという具体的な項により特定すべく用いられていると解すべきである。

さらに、あらゆる推論の原理が同じものであることを論じる文脈において、「ロギコース」(88a19)な手法が「確立されたことに基づく」(88a30)と呼ばれる個別論証科学における証明と対比されている。「すべての推論の原理が同じ原理であることは不可能」であることの論拠がまずロギコースに提示される。この議論の特徴は偽なる前提ないし原理から真なる結論が得られるケースがあることを指摘し、後に論理学において変項と呼ばれるアルファベット

文字記号による推論を事例として提示していることである。真なる原理からだけではなく、偽なる原理からも真なる結論が得られる以上、推論の原理がすべて同じではないと論じることが論理学と呼ばれる術における議論であると言える。一般的な用語を用いしかも変項を用いる論じ方はこれまでのこの手法と同様に普遍的な用語における思考様式を表わしていることには変わりはない。(88a18-30) 論理学がロギコースに論じられる学問であるのは、それが形式言論構築術的だからである。

この手法との対比で、「確立されたことに基づく」という仕方で、それぞれの類に固有な原理に基づく論証理論からして、すべての推論について同一の原理の存在の不可能性が論じられる。(88a30ff) そこでは「多くの真理の原理は類において異なりそして相互に関連しない。例えば、単位は点と相互に関連しない。というのも一方は場所を持たないが、他方は持つからである」(88a31-34) と語られ、算術と幾何学の類としての相違に訴えて論拠が示されている。これはアナリュティコースに提示された議論である。以上から、ロギコスな議論はアナリュティコスな議論つまり個別論証科学における論証言語の基礎を提供することが明らかとなった。その基礎のうえに、根拠を根拠として開示するのは、論証の仕事であると言える。

11 普遍的存在論の方法

これまでロギコースとピュシコースの関係、さらにはロギコースとアナリュティコースの関係を個々にテキストにあたって検討してきた。最後に、存在の探究に向かう哲学的実践として取り上げられるロギコスな手法がどのようなものであるかを『形而上学』Z巻の当該箇所を分析することにより明らかにしたい。

ロギコースという手法は普遍的存在論における存在としての存在の考察においてその能力を発揮する。『形而上学』Z4—6において、ロギコスな手法のもとに実体の探究が企てられている。Z4の冒頭で、アリストテレスは「われわれはまず「[Xで] あることは何であったか (τὸ τί ἦν εἶναι 以後「本質」

と表記)」についていくつかロギコースに語ろう。即ちそれぞれ [X] にとっての本質はそれ [X] が自体的に語られるところのものである」(1029b13f) と言う。彼は『トピカ』においてアカデメイアの「何であるか」の探究の方法の混乱を指摘し、「方法を持っていれば、容易に提出された問題について議論できる」(101a27f) として、それぞれ「存在」と存在の様式である「何であるか」の語られ方の分類である範疇とプレディカビリヤにより議論の分析の方法を提示したのであった。ここでは何であるかの一つとされる「本質」についての語り方が問題とされており、「自体的に語られるもの」という表現と共に極めて一般的、普遍的な命題が提示されている。これらの用語の関連を考えることそれ自体がロギコースに思考することであると言えよう。

『形而上学』Z4 において「存在」と「何であるか」の双方とも端的には実体に属するが、他の範疇にも派生的に属しクロスカテゴリーアルであることが確認される文脈において、アリストテレスは範疇の区別に基づく端的一派生的の言語表現を分析する。

われわれは「性質」についても、それが何であるかを問うことができるので、性質は何であるかのうちに属する。しかし、それは端的にそうであるわけではなく、ちょうど或る人々が「あらぬもの」について、あらぬものは、端的にではないがあらぬものであることによってあるとロギコースに語るように、そのように性質もある。かくしてそれぞれについて「いかに語るべきか (τὸ πῶς δεῖ λέγειν)」について考察しなければならないが、それに劣らず「いかにあるか (τὸ πῶς ἔχει)」も考察しなければならない。それ故に今や語られていることは明らかであるので、本質も「[存在] や「何であるか」と] 同様に第一にそして端的な仕方では実体に属するであろうし、続いて[派生的に] 他の範疇に属するであろう。(1030a23-31, cf. Plato *Soph.* 237a, 256d)

ここでは範疇とプレディカビリヤの分類に基づいて、アリストテレスは存在について非存在も存在すると言われるその仕方、さらには何であるかについて性質も何であるかであると言われるその仕方について述べ、何であるかは性質について語られもしようが、第一にそして端的に実体について語られることを、析出している。つまり、「あらぬものはあらぬ」ということは同一律に即して端的に真である語り方であるが、「あらぬものはあらぬものである

ことによってある」は派生的な語り方として成立している。同様に、範疇の「何であるか」やプレディカビリアの固有定義により意味表示される「本質」を「いかに語るべきか」という視点から分析し、彼は「語られていること」の「明らか」さから、本質の「いかにあるか」即ち「第一に端的に実体にある」という存在様式を主張している。かくして「ロギコース」とは『範疇論』や『トピカ』で展開される範疇やプレディカビリアをもとに「いかに語るべきか」という視点から考察する手法であると言えよう。これはきわめて普遍的な用語の規範性のもとに語り方を分析する方法を表現しており、しかも単に吟味検証や議論の仕方の訓練としてではなく、ここでは実体や本質の「いかにあるか」の探究に向けられている。それぞれの事物、事象の規範的な言論様式はその存在様式の理解の予備考察であると理解することができる。⁽⁴¹⁾

「いかに語るべきか」と「いかにあるか」がセットでロギコースに語られていることはこれが論じられる文脈からして、また今まで見てきた、さらにここで見る他の論述からしても明らかである。一つには Z4—6 には自然学的な即ち質料と形相による具体的な因果論的な論述を見い出すことができないことがその理由である。さらに、Z11 でその探究の整めとして「本質は何であるか、そしてそれ自身が自体的にいかにあるかが、あらゆるものについて普遍的に語られた」(1037a21f) と、存在主張が普遍的に語られている。第三に、普遍的に語る言論の導きのままに他にも存在主張を導く議論が見い出される。例えば、質料と形相の永遠性の言論による導出にそれを見ることが出来る。「難問集」で存在の原理論をめぐる問題は「個々の事物以外に何物も存在しないのか」と定式化されている。(999a 26) もしそうであるとすれば、(1) 無限の個物に共通するものがない故に、感覚的な認識のみで、普遍的相の下に認識することは不可能となり、さらに(2)なんら永遠なものや不変なものも存在しないことになる。彼は可感的事物が質料と形相の結合体であるとして、結合体より形相や質料は「とりわけ存在している」(999a32) そのような質料形相論により、(1)(2)に解決案を提示する。そこでの質料と形相の存在は「永遠的なものが全く存在しないなら、生成も不可能である」(999b5) という主張を、自然の観察記述によらずに、ロギコースにつまり普遍的な議論の導き

のままに証明することによって提示される。前提1：生成には必ず生成過程にあるものと、それがそこから生成してくる何かがなければならない。前提2：この生成過程はどこかで終止せねばならない。前提3：非存在からの生成は不可能である。結論：故に、この過程の最初のもは生成したものではなく永遠でなければならない。これが質料の永遠性ないし生成消滅を免かれていることのロギコスな議論である。他方、形相についても同様な議論が見られる。(999b5ff, 192a29ff, 1032b31ff, 1033b2ff, 1069b35ff, 1075b24ff)

「ロギコース」という概念を明示的に規定しているのは、実体論を展開している『形而上学』Z4のみである。それは「いかに語るべきか」(1030a27)という言語の規範的な使用にかかわる探究の手法である。従って、「ロギコース」は基本的にはこの簡潔な規定を基準に理解されるべきである。この規範性は、現用言語の分析を介し、命題を分類する範疇やプレディカピリアを基礎に、適切な言明を判定する規則論を展開する『トピカ』の弁証術の成果に基づいている。言語的事実が現用言語における正しさとして規範化することは「われわれにとって可知的なこと」からの出発であると言ってよい。そしてわれわれにとって可知的なものから出発し「端的に可知的なもの」を共有見解にしてゆくことは、命題の確立という弁証術の一つの寄与であると同時に知識探究のプロセスとも言えよう。(cf. 141a26ff)私は実体論の展開の文脈において、「いかに語るべきか」という探究様式が「ロギコース」(1029b13, 1030a25)と言われ、「弁証術的に(διαλεκτικῶς)」(eg. 105b31, 161a33, 403a2)という術語が用いられていない事実のアリストテレスの哲学的方法論の明確な自覚を見る。私はこの手法の採用は「能力の方向」において存在論上の認識に向けられていると解する。この箇所「ロギコース」に対する「いかに語るべきか」という明示的な記述を基礎にするなら、この語には「形式」に「べき」という規範性が含意されることも鑑み、ここでも「形式言論構築術上」という訳語をあてることができよう。

ロギコスな議論は存在主張を導きうるとして、Z4—6の実体論のロギコスな議論の基本的な主張は、本質はクロスカテゴリーアルであるが、端的には実体に本質があるということと、さらに「自体的で第一のものども」(1031b13f)

の場合、事物と本質は同一であるというものである。質料から離存的な形相が存在するとすれば、それは形式言論上「自体的で第一のものども」であり、その本質と同一である。範疇、プレディカビリヤ、そして自体性等一般的言論に含まれる現用言語、術語を駆使して、矛盾律を基礎に言語の規範的な力により議論を展開する実体論は、実体の存在様式探究の不可欠の要素である。それ故に、言論様式が存在様式の解明の予備考察となるロギコスな手法は、単なる弁証術の営みとは能力の方向において異なり、反駁的吟味を事とする弁証術を基礎としながらも、それを乗り越え哲学的な探究の手法として用いられ、ソピアを求めていると言うべきであろう。

続いて、Z17を検討する。この章は『分析論後書』において事物、事象の一致性を説明する因果論上基本的な特徴を根拠として把握する論証理論に基づく説明論的アプローチが、形相と質料による実体の探究においても適用可能であることを論じる箇所として重要である。この架橋を、より厳密に言えば、方法としての弁証術を構築するロギコースという手法が、『形而上学』においては現用言語の規範性のもとに存在の探究に向かうが、或る限定された類のなかで根拠を根拠として捕える論証理論の延長線上にある説明論的アプローチとともに、現実の自然世界におけるピュシコスな根拠の探究の指針として機能し、これらの規範に適合する存在の根拠としての実体がピュシコースに探究される。形式言論構築術上、自体的同一性を満たすものとしての「本質」が具体的に質料形相論のもとに自然世界において探究される。「アナリュティコース」と「ピュシコース」という手法双方も言論によるものである限り、その基礎に「ロギコース」が機能している。なおロギコスな議論は自然を超える存在についても対応できるが、他の二つの手法との総合的な働きにより得られた知見はこの超越的な存在探究においても有益である限りにおいて、他の二つの手法も超越的な存在探究においても機能しているというべきであろう。

Z17は多くの注解を要求するが、ここでは方法論上の解明にとどめることにする。Z17冒頭において「実体は何でありまたどのようなものかを語らねばならない」(1041a6)とし、「いかに語るべきか」から考察を進めるロギコス

な探究を示唆している。ひき続き彼は「実体は原理でありまた何らかの根拠であるので」と探究の方向を根拠の探究に定位している。われわれが何かを根拠として語ることができるのは、『分析論後書』においては個別科学の次元で論証の中項の位置を占めるものを確定することによってである。『分析論後書』B巻においては実体も論証を枠組みとして発見的探究の対象とされていたが、実質的には雷や蝕等の自然事象が主な対象であり、質料と形相はそこでは論じられることなく、始動因や目的因が中項の位置を占め根拠として把握されるものであった。事物、事象の必然的な諸属性を一なるものとして統一する因果論上基礎的な特徴を確定する論証理論は、『形而上学』における実体の探究においてもその基本的な理念において継承されている。

論証が探究論的文脈において知識獲得のために設定する規範に関して、この箇所においては「何故に同じものが同じであるかを探究することは、何も探究しないことである」とされている。(1041a14f)ここでの分節は雷について「何故に音響が雲間にあるのか」(1041a25)と平行関係にあるものとして、「何故に質料が一なる合成体であるのか」という仕方でなされる。(1041a26f, 1041 b5, b11)この分節の仕方をめぐる文脈でアリストテレスは次のように述べている。

何故にこれら、例えば煉瓦や石、は家であるのか。かくして根拠を探究していること明らかである。これはロギコスに言えば(ὥς εἰπεῖν λογικῶς)本質であり、それは或るものども、例えば家やベッド、については何かのためであり、或るものどもについては何が第一に動かしたかということである。……相互に語られないものどもにおいては探究されているものがとりわけ気付かれない、例えば人間とは何であるかが探究される場合のように、端的に語られ、これらがこれであると規定されないからである。むしろ分節して探究しなければならない。さもなければ、何かを探究ししかも何も探究しないということになってしまうであろう。存在を把握しまた手にしていなければならないので、明らかに何故に質料がなにものかであるかを探究する。例えば何故にこれらは家であるのか。なぜなら、家であること(ὅ ἦν οἰκία εἶναι)はそれであったところのものがこれらに属しているからである。また、何故にこれ、或るいはこのようであるこの物体が人間であるのか。従って、質料の根拠が探究されており、それはそこに何であるかが属する形相である。⁽⁴²⁾しかし、これが実体である。かくして端的なものどもについては探究も教示も存在せず、このようなものどもについては探究の他の様式がある。しかし何ものかからの結合体はすべてが一なるものであ

るという仕方であるので、それは[穀物の]集積のようではなく、音節のようである。音節は字母ではなく、 β と α は $\beta\alpha$ と同じではなく、肉は火と土でもない。(1041a26-1041b14)

ここでは実体の探究という文脈においてロギコースにつまり形式言論構築術的に語られる本質とピュシコースに開示される根拠の関係が問われている。そしてそれを媒介するのが発見的探究論における論証による説明である。⁽⁴³⁾ 探究対象が存在することを知り、ひとは何故にそうであるのかを問うが、問いの分節の仕方が注目されている。そして問いの分節は全体が一なるものであることを明らかにすることを求めてなされる。結合体は穀物の集積のようではなく、音節が字母すべてから一なるものとして構成されているように、そのような一なるものであり、そしてそれを一ならしめている根拠が問われている。ロギコースに語ることは、もし事物や事象が一なるものであるとすれば、それを一なるものとしている根拠も一なるものでなければならぬであろうということである。本質はその自体的同一性を表現している。これらの煉瓦や石が家であるのは何故か、その根拠が探究される状況において、その根拠は「家財の保護」という目的因であるが、「ロギコースに(形式言論構築術的に)言えば本質である」とされている。「本質」を語ることが、そのまま根拠が語られる次元とは異なる一つの次元を提示することになる。ロギコスの議論は同一や異等存在の一般的な分析語を用いて議論を展開するが、根拠を根拠として把握するのは学がそこにおいて成立する或る一つの類のなかで論証の諸条件を満たすことによってなされる。ロギコースに存在要請される自体的同一性としての本質を個別諸科学は具体的にピュシコースに因果論的役割をなすものの探究を通じて充足させる。しかし、それらは何らかの仕方に対応していることもこの箇所から知ることができる。一つの問いは本質とは、しばしば論じられるように、あらゆる仕方で形相と同義であるのか。それとも形相という存在者がそれ自身が一なるものであることの根拠を他にもたず、それ自身一なるものであるが故に何かの本質であるとされるのであろうか。結合体が一なるものであるとするなら、その究極的な根拠も一なるものであるに違いない。しかも、根拠が一である故に、それに基づく

結合体が多になってしまうことのない、そのような一なるものでなければならぬ。少なくとも、この箇所において一性の根拠が問題になる時、それを「本質」という用語により説明する時はロギコースに語られているということは明らかである。もしこれまでのロギコースの分析が正しければ、これは形式言論構築の現場で普遍的な用語を用いて言葉の分析を介して一つの存在様式を主張することであった。そしてこの手法は、現実世界において事物、事象の一性を根拠づけるものを四原因のうちに探すピュシコスな探究のガイドをなすものであると言えよう。以上で「ロギコース」という手法が語られる箇所すべてを考察したことになる。

13 論証理論と自然学的実践

最後にこの節と続く節において、第5節にあげた三つの方法論の関係をめぐってアリストテレス哲学の体系的理解を妨げられる二つのアポリアに、これまでの方法論をめぐる議論から応答を試みよう。

一つは『分析論後書』においてアナリュティコースに展開された論証理論が自然学的諸著作におけるピュシコスな自然事象の根拠の探究においては適用されていないのではないかという問いである。「理論と実践」の分裂に対する、従来の応答は次のようなものであった。J. Barnesによれば、三段論法による推論は科学的探究に何ら役割をもたず、「論証理論はいかに科学の現場で達成された知識の集積体が最も効果的かつ効率的に提示され、教えられるべきかの形式的説明を与えるものである」という意味において「教育上のアドヴァイス」を事とすると理解される。⁽⁴⁴⁾ A. Gotthelfは『後書』が科学方法論の書ではないという点においてBarnesに同調しつつ、論証科学は推論の言語と形式において提示されねばならないという「その基準によれば、『動物部分論』II—IV巻はなるほど悲惨なほどに失敗している。『動物部分論』II—IV巻が「試論的」、「探索的」または「弁証術的」と考えられた時、その非公式的な特徴は驚くにあたらない」と述べ、アリストテレスの科学的実践はまだ推論形式で提示されるこのとない、論証の前段階のものであると解してい

る。⁽⁴⁵⁾ さらに、類似の見解として、A. Kosman は論証理論は科学的理解の基礎にある論理的特徴を記述したもの、ないし適切な科学の形式的な記述を提供するものであり、自然学者の説明は、実際にそう提示されてはいないが、「適切な形式におかれうる」ものであるとしている。⁽⁴⁶⁾ また、J. Clearly は、原理への道と原理からの道つまり帰納と演繹の区別に基づき、一方、三段論法による推論は原理からの道であるが、他方アリストテレスの「弁証術的な方法は原理への帰納的な道である」という見解に組し、上り道として弁証術的、自然学的探究を特徴づけている。⁽⁴⁷⁾

この論争を 1969 年に引き起こした Barnes は『分析論後書注解』の第二版 (1994) の「補遺」において、これまでの議論を振り返り、次のように述べている。「多様な企てがこの明白な不整合を説明するために、ないし説明しるためになされてきた。『後書』は科学的方法論を記述してはいないので、アリストテレスが科学的著作において、それに従いそして、時に、記述している諸方法が『後書』の処方適合しないことに不平を言うことは思い違いというものであろう」。⁽⁴⁸⁾ このように、彼は『後書』の一つの理解のもとに、理論と実践をめぐる不整合をせめることはできないとしている。この一つの理解については、彼はほとんど考えを変えていない。

『後書』は、第一義的には、いかに実践中の科学者が発見または構成している様々な事実と理論が体系的に組織化され、そして可知的に提示されるべきかを探究することに関わっている。教えることとの関連はこうである。教師が科学的知識の一群を伝達することに関わる限りにおいて、彼はその組織化と説明的な一貫性がそこにおいて可知的に啓示される一つの形式においてそれを提示することによって最善のことをなすであろう。この補遺において引用されている [1969 年の論文の] 一節は私には、今だに、『後書』におけるアリストテレスの全体的な目標の最善の一般的な解釈を表わしていると思われる。⁽⁴⁹⁾

これらの従来の見解を、総じて、科学的実践の論証理論に対する「前段階説」と呼ぶことができる。というのも、これらは動物学や生物学等における科学者の具体的な実践の集積は「効率的」に「演繹的」な「組織化」にもたらされ、「適切な形式におかれうる」という見解を表明しているからである。もし、彼らがこのように前段階説にコミットしているということが事実であ

るなら、つきつめた次の問い「もし『後書』が存在しなければ、アリストテレスは自然学者として生物や天体を観察、研究するさいに、いかなる不都合を持つことになるのであろうか」に対して、彼らの応答は一切或いはほとんど影響を受けないというものにならざるを得ないであろう。私は『後書』はアリストテレス自身の科学的実践の大きな指針を提供していると解する。

ここでは、『後書』の主要目的は何であり、何が明らかにされたのかを詳しく論じることにはできないが、彼の方法論の理解に関連する限りにおいて、この問題に応答を試みたい。そもそも、理論と実践の乖離さらには不整合という問いの立て方が誤解を招くものである。アリストテレスは『後書』を執筆する時、ちょうど彼が弁証家として『トピカ』を書いたのではないように、個別科学者として書いたのではない。『後書』と生物学的諸著作に示される彼の研究実践は、個別科学者が自らの領域において、観察と仮説のフィードバックから理論を仕立てるような関係にはない。『後書』の企ては、とても、哲学的である。そこでは存在一般の理解を常に目標にしている哲学者が、存在の一部である類と類の固有の原理のもとに形成される学問それも論証科学というものの明確な理解に進んでいる。(eg. A2-5, 6, 10, 12) また、諸個別科学の関係問い、各々の学の自律性と連関を解明している。(eg. A6-14) さらに、知識や因果性、必然性そして意味、存在、本質そして論証と定義の関係等が論じられている。(eg. A2, 4, B8-10) これらの議論が哲学的であるのは、個別科学者であれ、誰であれ、言語を使用する探究主体としての心ないし靈魂はすでに、言語と心（靈魂）と実在についての何らかの総合的な理解のもとに、探究実践を行っているからである。たとえ現場の科学者は自らの立場を自覚しなくとも、言語、心そして実在について何らかの形而上学的立場にすでに帰属している。知識や因果性についても同様であり、何らかの存在論的、形而上学的関与のもとに科学者は探究を行っている。科学的な理論と実践を哲学的な基礎のもとに打ちたてることが『後書』の仕事の中心である。アリストテレスがもし『後書』を通じて、これらの明確な理解なしに、自然学上の探究を行っていたとしたら、ピュシコスの営みを知識的な営みの全体像のなかで位置づけることはできなかったであろう。自然学が哲学に基礎づ

けられていること、そしてさらに自然学上の知見が哲学的な存在の総合的な理解にフィードバックとしての機能を果たしうることを理解できずに、このような壮大なカテドラルに比すべき、諸学問の総合的な統一をなしえなかったであろう。

この点をより具体的に見ていこう。私は『アリストテレスにおける説明：論証科学と科学的探究』において、『後書』は理論的、実践的そして実用的の三つの関心から構成されていることを主張した。⁽⁵⁰⁾ これらの関心は関連するが、相対的に自律したものである。ここでは、最初に、このアポリアの解決に有益である限りにおいて、理論的関心のもとに構築される学問の理想的な構造に関わる論述を紹介する。理論的関心は、科学的知識それも「端的な知識 (*ἐπιστήμη ἀπλῶς*)」(71b15, 73a21, 75b24) を可能にする最も理想的な論証構造にそそがれ、彼はそこで公理論的演繹体系を構築している。その文脈において、アリストテレスは「論証 (科学) (*ἡ ἀποδεικτικὴ ἐπιστήμη*)」の概念を展開している。(71b20, 73a22, 74b5, 76a37, 76b11, 84a10) これら六つの箇所を「論証科学」と訳することの論拠についてはここで詳しく論じることができない。⁽⁵¹⁾ 従来 *ἐπιστήμη* の訳として「知識」と「科学・学問」の判別が明確になされてこなかったが、アリストテレス自身はこの点自覚的である。

彼が理解する科学それも論証科学は諸特徴を持っている。私は、アリストテレスが「論証科学」によって単に「諸命題の体系」(M. Burnyeat)⁽⁵²⁾ や「論証の集合」(J. Barnes)⁽⁵³⁾ を理解していたのではなく、「端的な知識」を産出する体系的な方法として位置づけていたと解する。彼は A1 冒頭で数学等の諸学に触れ (71a3), A2 で端的な知識の条件を述べ、次のようにそれをもたらす「論証科学」を提示している。

われわれは論証を通じて (*διὰ*) 知ることがあると主張する。「論証」とは知識的な推論のことである。「知識的」とはそれを持つことによってわれわれがそれに即して知るところのものである。かくして、知ることということがわれわれが提示したとおりのものであるなら、論証科学 (*τὴν ἀποδεικτικὴν ἐπιστήμην*) は真で第一、無中項そして結論よりもより可知的でより先そしてその根拠であるものどもに基づく (*ἐκ*) のでなければならない (*ἀνάγκη*)。というのもこのようにして諸原理は証明されるものに

とって固有なものとなるからである。(71b17-23)

この箇所ではじめて「論証科学」が導入される。この句は従来「論証的知識」と訳されてきた。⁽⁵⁴⁾しかし、論証とは科学者が「それを持つことによって」知識を得る、そのような「知識的推論」のことであり、ここでは科学者の心的状態としての論証的知識が問題ではなく、知識を産出する推論の構造が問題とされている。知識の産出という能動的な機能は学問に属しており、その能動的な推論構造を議論することは論証科学について論じることに他ならない。ここではこの解釈の四つの論拠を挙げる。

第一に、「科学」「学問」としての *ἐπιστήμη* の使用は具体的な個別科学例えば「幾何学」や「天文学」と一緒に表現されている。(eg. 76b4, b12, 77b9, 79a18, 87a31) 彼は『後書』でこれらの個別科学がどのようなものであり、いかなる条件のもとに成立するかを「論証科学」の概念のもとに検討している。

第二に、彼は科学としての *ἐπιστήμη* について語る時、「科学」は個々の知識に関わるものとしてではなく、一つの固定された領域とその全体的な構造に関わるものとしている。(eg. 76a11, a38, 39, b12, 16, 87a37) その文脈においては「各々の科学に即して (*κατὰ τὴν ἐπιστήμην*)」という仕方で、前置詞 *κατὰ* が一つの科学が対応する一つの領域に命題や推論を限定する役割を担うものとして用いられている。(77b8, 77a36-77b2)

第三に、論証科学の特徴を表わすものとして、前置詞 *ἐκ* (〜に基づいて) の使用がある。彼は科学としての *ἐπιστήμη* を念頭に置いている時は、前置詞 *ἐκ* (〜に基づいて) を使用し、動詞として「論証する」や「推論する」が伴い、決して「知る」という動詞を伴うことがない。(eg. 74b15-17, 75a30, 76a14, b14, 77b4f, 78a5) 他方、「知る」は決して前置詞 *ἐκ* を伴うことはなく、前置詞 *διὰ* (〜通して) が用いられる。(eg. 71b17, 72a37, 83b38, 84a5, 87b19, 99b20) 従って、「すべての論証科学は……第一のものどもに基づいて論証する」(76b11f)と言われるが、「論証科学は……第一のものどもを通して知る」とは決して表現されない。なお、「原理」という表現は決して「原理を通して」という前置詞 *διὰ* に先行されることなく、常に「原理に基づき」という前置詞 *ἐκ* に先行されていることである。これはなぜかと言えば、「原理」は常に

自存的にあるものとして絶対的な視点から陳述されているからである。⁽⁵⁵⁾ 私は前置詞 $\epsilon\kappa$ を「科学的前置詞」と呼び前置詞 $\delta\iota\alpha$ を「認識論的前置詞」と呼ぶ。⁽⁵⁶⁾

第四に、「すべての論証科学は三つの事柄にかかわる」。(76b11) それは類とその諸属性さらには諸学に共通な公理の三つに関わる。そこでは、「論証科学」が主語となり、類を「指定する」、公理に基づき「論証する」さらに属性が何を意味するかを「仮定する」、さらにその属性を「研究する」という仕方で、論証科学が擬人化されることがある。(76b3-10, 76b11-16)

このように論証科学は数学を範型とし、公理と固有の原理に基づき定理を演繹し端的な知識を産出する、そのような構造をもったものとして構想されている。端的な知識を形成する条件を満たすものとして、この構想が提示されている。アリストテレスは「論証科学」という概念により、「端的な知識」をその体系的な方法によって形成していく能動的な機能を理解していることが明らかである。私は「アリストテレスが個別科学の基礎になっている「科学」というものの基本的な理論をもっており、各々の科学者は、理論的には既に論証科学の構造をめぐる理論の導きにより設立され、また方向づけられている諸分野において自分の科学的実践をなすことができる」と主張した。⁽⁵⁷⁾ なお、彼が知識を産出する方法として「学問」を理解していることはそれが「方法」と訳されることの多い、“ $\mu\acute{\epsilon}\theta\omicron\delta\omicron\varsigma$ ” という術語と同義なものとして『自然学』の冒頭等において使用されていることから支持される。(184a10-16, 101b3) 先に見た「論証の集合」等の「科学」理解は論証科学の働きによって産出される結果を表現しており、この能動的側面を見逃している。もちろん、産出するのは学問にかかわる科学者 ($\delta\acute{\epsilon}\ \epsilon\pi\iota\sigma\tau\acute{\alpha}\mu\epsilon\nu\omicron\varsigma$) であるが、彼は論証科学の構造に対する理解に基づいて、諸命題の体系を構築する。以上から「端的な知識」の理想的な成立条件および構築の方法として論証科学の理論が『後書』において展開されており、理論的関心は厳密学の成立条件に向けられていると言えよう。

これらのことから、彼の理論的関心の中心は論証科学がどのような推論構造をもた「ねばならない」(71a20) かという端的知識を産出する条件や規範

性を論じることにあることが分かる。そうであるとすれば、Barnes が論証理論が「排他的に教えることに関わる」⁽⁵⁸⁾ という私の分類では実用的な関心のみに限定せざるをえない理由をいくつか挙げるが、次の彼の決定的な主張は崩れることになる。「最後に、the killing blow はこうである。『後書』のどこにもアリストテレスは論証理論が数学的諸科学のためにだけ意図されていることそれだけを暗示しているところはない。反対に、彼が科学的知識について語りまた科学一般について語っていることを彼は強く含意している」。⁽⁵⁹⁾ これは「致命的な打撃」ではない。アリストテレスが「すべての論証科学」(76b10) と語る時、彼は何であれ端的な知識を形成する条件を満たす論証科学と呼ぶものを意味している。『後書』で言及される諸学問がすべて、実際にこの条件を満たしているということではない。それらの学が満たしうるかどうかが吟味されていると言ってもよい。彼の理論的関心は端的な知識を形成する理想的な条件として「最も厳密」(306a27) であるとされる数学を範型に論証科学の構想を提示しているのである。Barnes はこの理解が「アクセスすることのできない理想」であるという E. Maier の立場と同じであると批判するかもしれない。⁽⁶⁰⁾ しかし、これは単に理想ではなく、厳密学としての数学に基づいて規範性が示されていること、さらに「アクセスすることのできない」と断定することはできず、彼は数学において、少なくとも、それが可能であると考えていたと応答しておこう。現実にはユークリッドの『原論』においてその一つの実現を見ることができる。

さらに、これらの論証科学のアイディアが持つ諸特徴は、彼が Burnyeat の主張とは異なり、論証科学の構造の解明をこととする「科学の哲学」を、知識を持つ者の認知的状態の考察にかかわる「認識論」から明確に区別していたことを明らかにしている。⁽⁶¹⁾

このような端的な知識を産出する理想的方法としての論証科学の構想は何ら生物学的実践等に影響を与えないのであろうか。科学者としてのアリストテレスが、科学哲学として展開した端的な知識獲得の方法としての論証科学の導きのもとに、生物学的実践に取り組んでいることを、現場の科学者も類とその固有原理とおよびその属性に関わっている限り、単に三段論法に基

づく論証が見い出されないということから否定することはできない。実際、彼は『自然学』の冒頭で「知ること (*εἰδέναι*) と科学的に知ること (*ἐπιστάσθαι*) は原理や根拠や要素がそれらに属するところのすべての学問・方法 (*μεθόδους*) に関して、これらを知ることに基づき、生じるものであるので、自然についての学問 (*ἐπιστήμη*) に関しても、まず諸原理を規定することから企てなければならぬ」と述べている。(184a10-16) ここでは各々の学の領域を決定する類とその原理に基づき、知識獲得の営みがなされねばならないとされており、論証科学の構想に基づいているといえる。

従って、単に科学的実践の論証理論に対する前段階説というだけではなく、厳密学の構想を念頭にアリストテレスが自然の現場で科学的探究に従事するが、その規範性そのものつまり科学の理想的な構造理解が観察対象の記述をこととする生物学や動物学的著作には表わされることはないのである。その規範性のもとで、その充足をめざして科学的探究が行われている。理論と実践の乖離があるとすれば、端的な知識の条件の議論と現場における探究の次元の相違という意味においてのことである。そして、それは単に前段階説としてのみではなく、「科学」理解が規範性として現場においても機能しており、実践の後段階説をも含んでいると言わなければならない。

また『後書』のもう一つの重要な企てとして実践的関心に基づくものがある。それは、探究論の文脈において意味の把握から存在さらには根拠、何であるかの把握に至るまでの探究過程において、論証と定義がどのような役割を担うかを主題とし、そこでは論証が存在と根拠の把握をもたらすべく探究過程を導くものとして組み込まれている。この実践的側面に注目する時、Barnes が「アリストテレスは科学者に彼の探究をどのように導くかを告げることはなかった」とし「この書は科学方法論を記述していない」とする立場には同意できない。⁽⁶²⁾ 科学者であれ、神学者であれ探究するものは、言語と心と実在についての何らかの見解に組みしており、アリストテレスは、科学的、哲学的探究における、意味の理解から本質の知識にいたるまでの過程についての分析および、論証と定義を介したその哲学的な次元における探究の方法を構築していることは疑いえない。私にはこの書は単に「いかに諸事実や理

論が体系的に組織化されそして可知的に提示されるべきか」にだけ関わっているのではなく、優れていかに事実や根拠が探究されるべきかについて記したものであると思える。従って、Barnes 流の理論と実践の不整合の回避は説得的ではない。

もう一つの応答は、論証理論を基礎に自然世界における探究、とりわけ実体探究に説明論的アプローチが展開され、これは事物、事象の一性を根拠づけて説明する試みであるが、これは論証理論を規範としつつも、必ずしも三段論法により表現しなければならないものではなく、自然学的諸著作においても、論証理論の精神を踏襲しながらも、説明論的アプローチにより、三段論法に拘束されない仕方で探究の成果を論証理論に基づき表現していることが考えられる。根拠から事象を説明するという論証理論の精神は、説明論的アプローチにおいて十分に生きている。『分析論』には見られない質料と形相を自然事象の根拠と解するアリストテレスは、新たな説明原理を求めていることは確実である。しかし、彼は、論証の精神は十分に生かされるものでなければ、知識を主張することはできないことも十分に認識していた。それが『後書』を基礎にして『形而上学』において展開された説明論的アプローチであると言えよう。論ずべきことは多々あるが、「アナリュティコース」と「ピュシコース」の関係をめぐる一つのアポリアは解決されたこととしよう。

14 弁証術と第一哲学

続いて、「ロギコース」の一つの理解のもとに提示された弁証術と存在論の関係をめぐり第5節で提示されたもう一つのアポリアについて、何らかの解決を試みたい。さらにこの問題は「ピュシコース」と関連づけて新たに問い直すことのできるアポリアであるが、これらのアポリアについて方法論上の議論から論じなおしたい。端的に言って、問題は弁証術が共有見解を乗り越え第一原理等の知識に至ることができるかというものであった。一つの解決案は、先に触れた T. Irwin のように弁証術を純粹弁証術と強い弁証術に区別することであった。これのヴァリエーションとして、E. Berti は「対立は、

その議論が弁証術の公的な使用の目的である諸見解 (doxai) とその到達が弁証術の科学的使用の目的である真理 (taletthes) であり、真理と共有見解 (endoxa) ではない。というのも、後者は或る場合には真理の到達を認め、そして諸原理の場合にはこの目的に有益である唯一の前提だからである」と述べる。⁽⁶³⁾ これは一つの弁証術の使用の相違を強調することにより、Irwin の見解の問題を回避してはいるが、見解 (δόξα) と共有見解 (ἐνδοξα) を別の次元のものに配置することにより弁証術と存在論の連続性を確保しようとする試みである。だが、共有見解はあくまで見解、意見の次元のものであり、「偽である」場合もあり Berti の区分を支持するテキストを見い出すことはできないであろう。(eg.162b27f) さらに、これらの応答における弁証術を区別する試みはロギコースという手法に対する無理解からなされるものであった。これらに対し、私のこれまでの議論に基づく応答は、哲学が上位の学として、ロギコースという手法により方法としての弁証術を利用しつつ存在の探究を企てているということになろう。個別諸科学と弁証術の関係も同様に、科学者が弁証術的实践の成果を利用しつつ、存在の部分の探究に向かうということになろう。

共有見解をめぐる一つの興味深い問いがある。それは「ピュシコースに考察され解明された命題が普遍化、抽象化され共有見解となり、次の探究のために、ロギコースに立てられることがあるか」というものである。つまり、ピュシコースに獲得された探究の現場における情報が共有見解として、安定した現用言語網の形成に寄与しており、新たな具体的な探究対象が与えられたさい、そこでロギコースに形成される定義が、現場で観察と理論の形成に務めるピュシコースな探究のガイドの機能を果たすことがあるかが問題である。

ピュシコースに得られた命題が、観察、実験の現場においてだけピュシコースな命題であるとするのは笑止なことであろう。科学的知識の蓄積ということが意味をなさないであろう。科学的知識はロギコスとアナリュティコスな手法の補助のもとにピュシコースに得られるものである。ロギコスな手法とは「一般的な論拠」に基づくものであるとすることは、例えば、「物体」の定

義は「いくつかの面によって限定されたもの」とは、確かに現実に観察される物体なしにはこの定義は得られなかったであろうが、現場から離れて抽象化の次元で、思考だけにより一般的に得られる命題であると言える。「無限」についても「一般には、無限があるのは一つのものが常に他に取り込まれることによってである、そして取り込まれるものは常に有限なものであるが、常に他のものがある」と言われるさいにも、例えば、数えるという行為なしに、通過することのできないものがあるということを認識することはないであろうが、それを一般的に語ればこのようなものとなる。これは「他に取り込まれる」「有限」等との言語網によって理解される事柄であり、具体的な科学的、数学的知識なしにも理解しうる事柄であろう。しかし、科学的な命題と一般的な命題のあいだに明確な境界線をひくことはできないであろうし、そのような試みは愚かなものである。「自然科学」という語の意味するものは時代により異なるであろうし、科学的知見が共有見解となることもあろう。しかし、その都度、命題の内容はどのようなものであれ、ピュシコスな探究とロギコスな探究の二つの探究様式は存在し続けるであろう。このように一つの学問領域における言語網の広がり深化が、ピュシコスな探究を補助し、さらにそれがロギコスな探究に情報を提供するという仕方では、双方が連鎖関係にあり相補的に探究を展開するものと捕えることを可能にしている。

このような事情であるとすれば、自然諸科学が展開するにつれ、或る時点で探究の現場においてピュシコースに語られたことが、次の段階でロギコースに利用されるということが起こりうるということである。従って、これらは観察からか、それとも一般的な現用言語の分析からかという対象に対する関わり方の相違として理解されねばならない。さらに論証言語の乗り物の上にピュシコスな探究は運搬され表現されるが、それらが言語によるものである以上、これら二つの方法論は常にロギコスな方法論に依存することになる。これは弁証術の方法およびその実践と自然学の相補的な展開の可能性の問いに肯定的に応答することである。

今の問いを、角度を変えて今日の文脈において、次のように提示することもできよう。現在支配的な科学的知見が今後一層豊かになり、目的論的説

明が科学からさらには日常言語の場面から放逐されることがあるのであろうか。科学的知見が存在理解に影響を与えることは不可避であろう。現在相対性理論が共有見解となりニュートンのように時間と空間を絶対的な尺度としての存在とみなすことはない。時間の伸縮や空間の曲率が日常生活に与える影響は考慮にいれるほどのないものであるにしても、われわれが宇宙を考察する時、少なくともこの宇宙としては永遠なものではないという見解を持つ。アリストテレスにおいては宇宙が永遠というものが存在することの一つの論拠とされていた。彼は「たとえわれわれが一度も星を見たことがないにしても、思うに、星は依然としてわれわれの知っているのとは別の永遠的な実体であろう」と言う。(1040b34-1041a2) とは言うものの、この現代の科学的知見、共有見解に基づく考えとしても、この宇宙が生まれる前の宇宙そしてさらなる宇宙と無限に遡ることも想定可能であり、無限は可能的にあり、そして何か永遠的なものが現実的にあるというアリストテレスの枠組みと変わらないとも言えよう。

問いを生物学や靈魂論に対応する大脳生理学に移せば、心があるという共有見解は唯物論的、機械論的説明の席見により、心は存在しないという共有見解に取って代わられることになるのであろうか。悲しみを愛しいものを喪失した時の感情という目的論的に説明せずに、脳内の分泌物で説明したとして、それは悲しみそれ自体を理解したことになるのであろうか。それとも、事物それ自体としての「本質」の理解そのものも変わっていくのであろうか。始動因と質料因による説明だけが共有見解となる時、事物それ自体が始動因および質料的定義によって明らかにされるものとなるのであろうか。それとも科学言語と民間心理学の二重基準という分裂のなかでひとはずっと生きていくのであろうか。Russell は「一般的に言って、科学の進歩は分析と人為的な分離とによってなしとげられて来た」と言う。⁽⁶⁴⁾ この分離はますます大きくなっていくのであろうか。

これに対する一つの応答は目的論的自然観がどのようなものであるかを論じ、実際に自然がそのようなものであることを明らかにすることであろう。それと同時に、機械論的説明と両立可能である道を探すことである。私は「ア

「アリストテレスの目的論的自然観」において、アリストテレスの見解は唯物論的、機械論的説明が事物、事象が生起することの十分条件を特徴づけるが、目的論的説明が事物、事象の本質を開示するという立場にあることを論じた。⁽⁶⁵⁾しかし、事物それ自体としての本質は、あくまでも共有見解に基づきロギコースに事物の存在と認識の保証のために存在要請されるものである。従って、ロギコースに立てられる本質をピュシコースに具現化することが最も重要なアリストテレスのそしてわれわれの課題となるであろう。彼は先に見た『自然学』B7において目的因や形相因はピュシコースに開示されるとしていた。

心の存在の問題へのもう一つの応答はこうである。われわれの言語網は知覚や思考から構築されるが、それは身体と環境により限定されている。どの時代であれ、われわれには赤色が見えるであろうし、甘さが味あわれるであろうし、また愛を感じるであろうし、 $3 + 2$ は5であると考えているであろう。これらの意識状態の承認は身体とその運動がそれにより一つのものとして統一されている一つの意識主体としての心を要求するであろう。このような経験が、民間心理学と揶揄されようが、アリストテレスの時代と変わらない共有見解を形成し続けるであろう。個別科学は「存在の或る部分」(1003a24)を探究するものとされていた。大脳生理学における探究は、はじめから数式と伝達物質の定量的な記述のもとに意識の諸状態を記述する試みである。しかし、それはあくまで一つの視点からの存在分析であり、そこでははじめから心の存在は括弧に入れられているのである。その言語網は心の存在を肯定することも否定することもできないのである。あらかじめ「心」や「意識」はその言語網の要素から排除されているからである。或るいは、心はあるという共有見解を受け入れ、それらの存在を過程した上で、対応関係ないし翻訳関係を主張するであろうが、二つの言語網がそのような関係にあることを決定する第三の地点に科学的実践それ自身は立てないと言うべきであろう。アリストテレスは、生物学や靈魂論の目的論的な理解のもとに心や意識をはじめからそれらの学の言語網の中心的な要素として組み込んでいる。それは質料形相論として企てられている。ここに質料因と始動因だけによる自

然理解とは異なる総合的な理解の可能性が開かれていると言うことができよう。

15 結 論

これまでの議論からアリストテレスの方法論について次のようにまとめることができよう。「ロギコース」とは「いかに語るべきか」という視点から論理法則に則りつつ範疇やプレディカビアさらに同と異、一と多、超過と被超過等一般的な存在分析の用語を用いて、「いかにあるか」の存在主張を導出する方法である。それは、現用言語の分析を介し、われわれが手にしている共有見解とされている定義や概念理解をもとに、探究対象について言葉の上で明らかにする営みである。そのさい、われわれが手にしている定義がピュシコスな探究を経たものであるか、単に語意上の言葉だけのものであるかは問題ではなく、説得的なものであれば、かまわない。ただし、運動する自然科学的对象を探究するさいにはあくまでピュシコスな探究の補助として機能している。知識が現実世界の理解である限り、言論の力だけでは知識獲得には足りない。しかし、自然世界を超えるものの知識についても、自然世界における説明原理である質料形相論および現実態可能態論の枠のなかで探究される以上、不動で永遠な、そのもとに自然界全体が依存している超越的な存在者の探究においても、ピュシコースによる探究は基礎構築物としてロギコースによる探究を支えるであろう。

他方、「ピュシコース」とは探究対象の観察、実験を介しデータを集積し、根拠や原理の仮説を提示しその検証を通じて理論を構築する手法である。そのさいアナリュティコスな手法による論証理論とその延長線上にある説明論的アプローチという根拠開示の言論様式に、さらにはその基礎にあるロギコスな言論様式に依存している。また、この手法は運動する限りの質料を持ったものの探究に適用されるために、探究対象の領域上、その限界も自覚されている。カントがアンティノミーとして枚挙している類の、宇宙が時間、空間上有限であるのか無限であるのか、宇宙の根源物質は単純なものか合成さ

れたものか等の問題に関しては、ロギコスな手法に多く頼らざるをえないことが伺われる。時間や空間そして光の本性の探究においても、領域上特異点が存在する限り二つの方法が用いられるであろう。

「ロギコース」と「ピュシコース」の関係は次のようにまとめることができる。一つにはピュシコースは運動する質料を持つものという領域にその手法の適用が限定されるが、ロギコースは学問が言葉の営みである以上、どのような問題にも適用され探究のアクセスをつけるということである。第二に、双方が同一の見解を主張するということは、ロギコースという手法が単に概念分析に終始するのではなく、存在主張しうるものであるということを示している。そして言語次元におけるロギコスな分析がなんらかの存在主張をなし、ピュシコスな探究のガイドとして機能すると言える。二つの方法が同一の主張をなしうるものである限り、方法としてデータを集積するか、それとも言葉の力により推論するかという異なりはあるにしても、またパルメニデス、ソクラテス、プラトンの伝統に対する、イオニアの自然学者たちの伝統という歴史的な相違はあるにしても、また合理論と経験論というその後の哲学史の二大潮流の源流を形成しているにしても、アリストテレスにおいて相互が相補的であることは確実に語りうる一つのことである。

註

- (1) R. Rorty『哲学と自然の鏡』野家監訳 p. 4 (産業図書 1993)
- (2) 数学のなかでも、より少ない原理に基づく「算術は幾何学より一層厳密である」とされている。(982a28) なお、『ニコマコス倫理学』においては「諸知識のうちで最も厳密なものはソ피아 (哲学的知識) であろうことは明らかである。かくして学者は単に原理に基づくものどもを知るだけではなく、原理について真を語るものでなければならない」と言われている。(1141a16-18) ここでは他の一切がそこから導出される原理についての知識であるソ피아は最も厳密なものでなければならないということが要請されている。(cf. 982a25ff)
- (3) K. Brinkmann, *Aristoteles' Allgemeine Und Spezielle Metaphysik*, S. 53 (De

Gruyter 1979) G. Patzig, *Theology and Ontology in Aristotle's Metaphysics, 1959, 1973 Articles on Aristotle 3. Metaphysics*, ed. J. Barnes et al., (Duckworth 1979) カントをめぐる一般形而上学と特殊形而上学の区別については、量義治『カントと形而上学の検証』序および序章参照。(法政大学出版会 1984)

- (4) G. Rodier はアリストテレスの方法について、アリストテレスがプラトンを批判したその方法が、実は師から受け継いだ言論の方法であると指摘している。「アリストテレスがプラトンを存在や一また善を類のように考察した咎で非難し、またこれらの術語は類比によってしか意味を持たないと彼に反論した時 (cf. 92b13, 1096b27, 1018a35), また諸事物の元素と原理は、もしひとがそれらを「普遍的にそして類比的に (*καθόλου και κατ' ἀναλογία*)」理解する場合しかそれら自身ではありえないと断言する時 (1070a32), それは恐らく彼が師と戦うために使う武器を彼の師から借りているということである」。アリストテレスが一つの思考様式つまり形式言論構築術的な様式においてプラトンを継承していることは事実であるにしても、彼は他の様式、すなわち後述するように、自然学的と分析論的、論証理論的という様式を持ち、総合的に自らの哲学体系を構築しており、おのずと言論による探究の位置づけもプラトンとは異なるものとなる。

本稿において、私はアリストテレスの弁証術の理解がプラトンの哲学の方法としての弁証術とは異なることを示すであろう。彼は存在を探究する第一哲学の実践において方法としての弁証術を用いて、ロギコースに（形式言論構築的に）一般的、普遍的な議論の構築に向かい、ソ피아を求めると同時に、自然学的な探究のガイドとして機能していることを明らかにするであろう。Sur L'evolution de la Dialectique de Platon, p. 69, *Études de Philosophie Grecque*, (Paris 1926)

- (5) 池田康男『アリストテレスの第一哲学』第4章参照。(創文社 2000)
- (6) W. Jaeger はローマ時代に Varro や Cicero が「教養」を“*humanitas*”とというラテン語で理解したことを報告している。人文学の基礎がこの概念にある。W. Jaeger, *Paideia: The Ideas of Greek Culture vol. I*, tr. G. Highet, xxiii (Oxford 1939 (1976))
- (7) D. Charles, *Aristotle on Meaning and Essence*, p. 288 (Oxford 2000)
- (8) D. Charles はこの点に関し「アリストテレスの見解によれば、ある諸領域において真理に到達する最善の方法は、第一に、どこで彼の先行者たちと同時代人たちが同意しており、さらにどこで見解を異にしていたか、彼等の見解の最も妥当で魅力的な諸視点を尊敬するよう試みながら、それらの領域を探索することのうちに成り立っていた」と述べている。On Dialogue between Different Traditions in Philosophy, p. 21 (Journal of Japanese Trade & Industry 110th Issue 2000)
- (9) D. Charles, *Aristotle on Meaning and Essence*, p. 259.
- (10) G. Owen, *Tithenai ta phainomena, Logic, Science and Dialectic*, p. 240, (p. 85, 1961) (Duckworth 1986)

- (11) T. Irwin, *Aristotle's First Principles*, p. 50 (Oxford 1988) Irwin は一方では「強い弁証術は、諸前提が共有見解の事柄であるという事実を超えて、われわれがそれらを受容する或る善い理由を持っているところの前提に固着することを要求する」ものであるとするが、他方、強い弁証術の諸前提は弁証術的前提の「下位集合」であるとし、共有見解に含まれることをも認めている。(p. 476) 彼はしばしば自らの強い弁証術の理解において「誤っている」可能性を指摘し、二つの区別において歯切れが悪いが、その理由として「アリストテレスは彼の弁証術の説明における中心的な点のいくつかにおいてまったく非-参与的(non-committal)である」ことを挙げ彼に責任を帰している。(p. 479, cf. 50, 476, 478) 彼は『第一原理』における主要な問いとして「どのように弁証術が共有見解を超えて客観的な諸原理に導きえるか」を提示している。(p. 479, p. 49, p. 8) しかし、この問いが実際アリストテレス自身のものであるかは疑問が残る。『トピカ』A2 のこの箇所から弁証術と第一哲学の連続性ないし緩い同一性を主張するのは可能な一つの解釈にすぎないであろう。
- (12) E. Berti は「私の見解では、Irwin により純粹弁証術と強い弁証術のあいだに強調されている差異は、弁証術についてなされうる使用、その「公的な」そして「科学的な」使用のあいだの差異にのみ依存する。これらの異なる使用はアリストテレス自身により『トピカ』A2 のようなとても初期の作品において区別され、そして彼の経歴全体を通じて彼により維持されたものである」と述べている。E. Berti, *Does Aristotle's Dialectic Develop? Aristotle's Philosophical Development*, ed. W. Wians, p. 106 (Rowman & Littlefield Pub. 1996)
- (13) アリストテレスは弁証術の一つの役割を知的訓練として見ているが、それについて「このような〔弁証術的〕議論は教授のためではなく、訓練や試練のためであるから、明らかに、真なることどもばかりでなく、偽なることも推論されるべきである」と述べている。(161a24-26) また「検証術は弁証術の一部であるが、弁証術は応答者の無知のゆえに、偽なる結論を証明することができる」とも述べている。(169b25-27) ここに弁証術の本領が存在する。
- (14) ピュシコースが自然学の方法というよりも、「自然」ないしその形容詞「自然的」の派生として「自然本性上」という意味で理解したほうが、適切な箇所もいくつか見出される。『靈魂論』において、靈魂が生のも共通な能力であり、人が人を生み、植物が植物を生む生物の複製機構が「最も自然的なこと」(415a26) であるという議論の文脈のなかで、ピュシコースが次のように使用されている。「栄養を摂取しない場合には、何ものもピュシコースに成長することも衰退することもない」。(415b26-27) ここでは、自然学の対象というよりは、自然の持つ力が主題とされて「自然本性上」と理解すべきである。また『天体論』において、ものの軽重の議論のさいに、「われわれがものを重いか軽いかと言うのは、そのものが或る仕方ピュシコースに動くことができるという点においてである」(307b31f) と述べられているが、ここでも自然の力に対して言及され、「自然」

の派生と見るべきである。他にも、火の機能よりも肉の機能のほうが「ピュシコースには明らか」であるという議論においても、「自然本性上」の機能についての言及と見るべきである。(390a15f)『自然学』B7において「ピュシコースに動かす原理は二種ある」(198a35f)という一文も「自然本性上」のことと理解すべきである。Γ1における「ピュシコースに動かすものは動かされるものである」(201a23f)という一文も同様である。また、『(自然学)問題集』において、老年になると皮膚が黒くなることの探究で、「ピュシコースにわれわれの体に色を与えるものは血である」(967b18)とされる場合も同様に解すべきである。

- (15) これらの術語の使用回数の確定は CD. ROM, Thesaurus Linguae Graeca (Irvin 1990) による。
- (16) J. Barnes, *Aristotle Posterior Analytics*, 2nd ed. xix (Oxford 1993), Barnes, Proof and Syllogism, *Aristotle on Science The Posterior Analytics*, p. 58. (Padua 1981) 1981.
- (17) T. Irwin, *Ibid.* p. 8f. また彼は「彼は形而上学において実在論者であるが、弁証術の哲学を実践しているので、彼の方法と彼の諸結論のあいだの明らかなギャップは相当衝撃的である、そしてわれわれにいくつかの問いを生じせしめる、アリストテレスは自分でそれらの問いをみているにしても、いないにしても」と述べている。(p. 9)
- (18) D. Charles, *ibid.* p. 286, n. 25.
- (19) 藤井義夫『アリストテレス研究』p. 21. (岩波書店 1940)
- (20) G. Owen, *Titenai ta Phainomena*, *ibid.* p. 240, E. Berti, Does Aristotle's Dialectic Develop? *ibid.* p. 114.
- (21) Frede & Patiz が「ロゴコース」はアリストテレスにより、概して、内実的、学問的との対比において、言語的、概念的なものとしての研究を特徴づけるために使用される。アリストテレスが「単に」形式的なものとしての考究を描いていることとの関連で、その表現は軽蔑的な意味を引き受けがちである。けれども彼は決してそのような形式的分析の重要性を否定しない。ひとは、ただ、それが内実的な考慮により補われねばならずそして、なによりも、それらの位置に並ぶことができないということについて自らをはっきりさせておかねばならない」とこの手法の「形式的分析」性を強調する時、それが存在主張しうるものであること、そしてそれ故にピュシコスな主張と同一の見解を持ちうることを考慮していない。M. Frede & G. Patzig, *Aristoteles Metaphysik Z II*, S. 59. (München 1988)
- (22) D. Ross, *Aristotle Metaphysics II*, p.168, (Oxford 1924), J. M. LeBlond, *Logique et Méthode chez Aristote*, p. 205. (Paris 1939) Le Blond はその書において「ロゴコース」について四人の見解の引用している。「Robin は「アリストテレスの言語においては、λογικῶς は諸本質の真実で現実的で特殊的な統一性ではなく、それらが包括する一般性を考察することにより、しばしば事物を考察する抽象的で現実的ではない様式を、さらに、論証的ではなく弁証術的な一つの方法を指示している」と正しく述べている。同様

- に、Ross もロギコスなプロセスの低い価値を力説した後で、それが「抽象的な考察への指示」、同時に「言葉の考察と言語的探究への指示」を含んでいると述べていることも注意しておこう。E. Zeller は「ロギコスな手法は具体的な事物の考察を無視している」と指摘している。なお、Bonitz が *λόγοι λογικοί* を「より厳密には定義それ自身から由来する、そして諸概念の概念だけから生じる考察」として規定する時、彼がその特徴をはっきりさせている」。p. 209. n. 1.
- (23) 松永雄二は「ὁ ἀντιλογικὸς λόγος」(*Phaed.*, 90c) を「矛盾対立論法」と訳し、「およそすべての事柄には、互いに矛盾する二つの言論が可能である」という見解に立つ者が採用する反論のための論法であると紹介している。『パイドン』『プラトン全集第一巻』p. 261 訳注 1 (岩波書店 1975) 例えば、『リュシス』216a-b において「論駁家 (οἱ ἀντιλογικοί)」の問答を見ることができる。
- (24) R. Smith, *Aristotle Topics Book I and VIII*, p91f (Oxford 1997) R. Smith はこの困難さを次のように述べている。「アリストテレスは *logikos* を適用の広い一般性を伴った議論や命題について用いるが、しばしば「単に言葉のうえで」というさらなる含意をもって用いる。彼は “logical” な議論を「空虚」なものとしてそしてそれらを「主題に即した」真性な科学的証明と対比している。(GA. II8, 747b27, 748a7-13, *An. Post.* I22, 84a7f, 84b1f, I24, 86a22, I32, 88a19, II8, 93a15) 時にはそれは「論争に特に適している」ということを単に意味しているように思われる。『トピカ』VI は「論理的な」問題を「多数のそしてよい議論がそれについて生じうる」ものとして特徴づけている。(I29a29-31)」。 (p. 91) この見解については後に反論を提示するであろう。
- (25) アリストテレスは弁証術における命題と問題を次のように規定している。「問題と命題は言葉の使い方において相違がある。一方、「二足で歩く動物は人間の定義ではないか」とか「動物は人間の類ではないか」とか、このように述べる時、命題が生じる。他方、「二足の動物は人間の定義であるか、それともないか」と述べるならば、問題が生じる。……問題と命題は数において等しい。というのも、言葉の使い方を変えれば、すべての命題から問題をつくれるであろうから」。(I01b28-36)
- (26) Ross は「ロギカは弁証術と同じほどさえ論理学を意味していない。アレクサンドロスが初めてロギケーを論理学の意味に用いた」と述べる。Ross, *Aristotle*, p. 20, 1923. R. Smith はこの Alexander の見解をより詳しく紹介している。*ibid*, p. 92. T. Waitz と Le Blond さらに J. Tricot は「ロギコス」と「弁証術的」を「同義」とする。T. Waitz, *Organon II*, p.354, (Lipsae 1856), LeBlond, *ibid*, p. 205. n4. J. Tricot, *Aristote La Metaphysique I*, p. 357. n3. (Paris 1974) 後述のように、私は「ロギケー (形式言論構築術的)」というこの技術ないし学の一つの実践として、現在「論理学」と呼ばれるものが構築されていると解する。
- (27) Alexander Aphrodisiensis, *In Aristotelis Topicorum libros octo commentaria*, ed. M. Wallies, p.40 (Berlin 1840) R. Smith も同様。R. Smith, *ibid*, p. 81.

- (28) cf. R. Smith, *ibid.*, p. 149.
- (29) Philoponus はロギケーと弁証術さらにそれらの哲学との関係についての諸学派の見解を整理している。「はたしてロギケーそして弁証術的研究双方 (*ἡ λογικὴ τε καὶ διαλεκτικὴ πραγματεία*) は哲学の部分であるのか、それとも道具であるのかを、いやしくもこれについて昔の人々には対立するものまた相異なるものとして思われている以上、探究しなければならない。というのも、ストア派はこれを哲学の二つの対立する別の部分に分けて、これを対立する「哲学の」部分として示している。他方、ペリパトス派、即ちアリストテレスの流れをくむ人々は「哲学の」道具であるとみなしている。さらに、プラトンが属しているアカデメイアの流れをくむ人々は哲学の部分でありまた道具であると語っているように見える」。Ioannes Philoponus, *In Aristotelis Analytica Priora Commentaria*, 6.19, ed. M. Wallies (Berlin 1905) Cf. H. Ritter et L. Preller, *Historia Philosophiae Graecae*, p. 299 (Gotha 1913)
- (30) Smith は「弁証術的な議論は虚偽であるかもしれないが、共有見解となっている前提を有しているので、アリストテレスがここで “logical” と特徴づけている議論は少なくとも弁証術的議論の下位区分に属するように思われる」と述べている。R. Smith, *ibid.*, p. 149.
- (31) 一つの事象のすべてに四つの根拠があるということではない。例えば、ピュタゴラス派は「雷」を「ハデスにいる者を驚かすために」という目的因により説明したが、なぜ雲間に音響が起こるかを説明しえない。というのもそのような説明では音響が雲間において起こる必然性を説明できずに、別の場所に起こってもかまわない、そのようなものだからである。ここでは「火の消失」という始動因が、事象の生起の必然性を捕えることができる。(94b32ff, 93b8ff)
- (32) D. Charles はこの点について興味深い指摘をなしている。「アリストテレスの見解によれば、プラトンのプロジェクトは（もし成功裡に実行されるなら）ひとつの可能世界の抽象的な記述以上のものには至らないであろう。それは（われわれが実際に会うような）真性な種の説明に至ることはないであろう」。 *ibid.*, p. 363.
- (33) E. Hussey, *Aristotle's Physics, Books III and IV*, p. 78ff (Oxford 1982)
- (34) 無限についての「知識」は 208a28 において *ἐπιστάσθαι* ではなく、*γινώριζειν* が用いられている。この自然科学上の認識が厳密な科学的知識であるかは判明しない。しかし、202b30 においては *ἐπιστήμη* の対象として大きさや運動そして時間にかかわる無限が言及されている。

尚、彼は『自然学』Γ3 においても、能動と受動の運動に関する可能態と現実態の様式の理解について「ロギケーな難問」を提示している。(202a21ff) 例えば、教師と学習者は能動と受動の関係にある。教師はすでに知識を現実的に持っているが、学習者はそれを可能的に持っている。運動は運動することができるものつまり学習者に属するが、教師が現実活動できるのは学習者においてであるので、説明言表は二つであるにしても、

- 「両者の現実態は、あたかも、……坂の上りと下りが同じであるのと同様に、一つである」と考えられる。(202a18-20) この議論の文脈において、「ロギケーな難問」が提示される。「だが、ここには形式言論構築術上の難問がある。というのも恐らく能動しうるものの何らかの現実態と受動しうるものの何らかの現実態が存在しなければならないからである。一方は能動であり、他方は受動である。一方の仕事とゴールは能動であり、他方は受動である。従って、双方が運動である以上、それらが異なるなら、どんなものにあるのか。即ち、(1) 双方とも受動するものつまり動かされるもののうちにあるのか、それとも(2) 一方の能動は能動するもの、他方の受動は受動するものにあるかのいずれかである。しかしこれ[受動するもの]をも「能動」と呼ばなければならないとするなら、同名異義的なものとなろう」。(202a21-28) このように運動さらには現実態や可能態の理解に不可欠な形式言論上の議論がロギケーと言われている。これは単に R. P. Hardy 等が言うように“a dialectical difficulty”という類のものではなく、存在論の原理の理解にかかわる重要な問題である。弁証術的实践における弁証術の問題とこの種難問は区別すべきである。R. P. Hardy and R. K. Gaye, *Physics*, ad. loco, *The Completed Works of Aristotle I*, ed. Barnes (Oxford 1984)
- (35) 『天体論』の章区分は OCT (D. J. Allan) による。Loeb (F. Cornford) は異なる区分をしている。
- (36) 「もろもろの類に従って分割すること、そして同じ形相を異なった形相と考えたり、異なった形相を同じ形相と考えたりしないこと——これはまさに弁証法 (*διαλεκτική*) の知識に属する仕事であると、われわれは主張すべきではないであろうか」。(Soph. 253d)
- (37) 雄馬と雌ロバからは「ラバ」が、雄ロバと雌馬からは「ケッティ」が生まれる。ここでは簡潔さのために、議論をラバに限る。
- (38) eg. Le Blond, *ibid.*, p. 209f. ただし、エンペドクレス等自然学者たちの、精子の軟かきや、子宮の損傷に訴えてピュシコース説明するさいにも、誤ることがあるということは、当然のことながら注意を要する。以下、私はロギコスな探究が劣っておりピュシコスな探究が優れているという類の主張がなされているのではないことを明らかにするであろう。
- (39) eg. D. Ross, *Aristotle's Prior and Posterior Analytics*, p. 628, (Oxford 1949)
- (40) D. Charles, *ibid.*, p. 253. n. 11.
- (41) London Group は「「いかに語るべきか」は「ロギコース」(1029b13) を指示しているのではなく直前の「定義は多くの仕方でも語られる」という見解を指示している。それ故に、「語られたことは明らか」(1030a28f) に関しても同じ指示がなされている。「いかにあるか」は 1030b3 に至るまで先を指示している」と解している。M. Burnyat et al., *Notes on Z*, p. 27. (Oxford 1979) しかし、これまでの「考察する」に関する私の分析は「かくして……考察しなければならない (*δεῖ σκοπεῖν*)」(1030a27) はこの議論全体を支配している Z4 冒頭の「ロギコース」さらに直前の「ロギコース」(1030a25) を受けて、

- 「(ロギコースに) 考察しなければならない」を補い理解することが自然であることを示している。ロギコースは「いかに語るべきか」と「いかにあるか」をセットで捉えることができ、語り方の分析から存在様式の主張に導くものである。London Group が「いかにあるか」は本質が第一義的に実体に属するということを指示すると理解していることには同意できるが、彼等はこれらをロギコースという大枠のなかでセットで論じられていることを捉え損ねている。なお、Tricot は「いかにあるか」(1030a28) の問いからピュシコースな探究が始まるというが、ここでは適切な言語表現の帰結としてロギコースに存在主張がなされていると解すべきである。J. Tricot, *Aristote La Metaphysique I*, p. 365. n2.
- (42) 1041b7f は Bekker 版に従う。ὥστε τὸ αἴτιον ζητεῖται τῆς ἕλης τοῦτο δ' ἐστὶ τὸ εἶδος ᾧ τί ἐστίν. *Aristoteles Graece II* Ex Recensione Immanuelis Bekkeri, (Berlin 1831)
- (43) cf. K. Chiba, Aristotle on Explanation Part II, ch. 4, p. 3ff 『北海道大学文学部紀要』 No. 73, 1992.
- (44) Barnes, Aristotle's Theory of Demonstration, Articles on *Aristotle, I. Science*, ed. J. Barnes et al., p. 85, p. 77 (Duckworth (1969) 1975)
- (45) A. Gotthelf, First Principles in Aristotle's Parts of Animals, *Philosophical Issues in Aristotle's Biology*, p. 194, cf. p. 167. (Cambridge 1987)
- (46) A. Gotthelf, *ibid*, p. 195.
- (47) J. Cleary, *Aristotle and Mathematics*, 200f (Leiden 1995)
- (48) J. Barnes, *Aristotle's Posterior Analytics* (2nd ed.) p. xix.
- (49) J. Barnes, *ibid*, p. xix.
- (50) K. Chiba, Aristotle on Explanation, Part I, Introduction. 『北大文学部紀要』 No. 72, 1991
- (51) K. Chiba, *ibid* Part I, pp. 16-27.
- (52) M.F. Burnyeat, Aristotle on Understanding Knowledge, *Aristotle on Science The Posterior Analytics*, ed. E. Berti, p. 97.
- (53) J. Barnes, *ibid*, p. xviii.
- (54) ἡ ἀποδεικτικὴ ἐπιστήμη (71b20) は従来「論証的知識」「論証的理解」と訳されてきた。Eg. Ross, *Aristotle's Prior and Posterior Analytics*, p. 507, Barnes, *Aristotle's Posterior Analytics*, p. 2.
- (55) K. Chiba, *ibid* Part I, p. 73.
- (56) K. Chiba, *ibid* Part I, p. 21.
- (57) K. Chiba, *ibid*. Part I, p. 13.
- (58) J. Barnes, Aristotle's Theory of Demonstration, p. 77.
- (59) J. Barnes, *ibid*, p. 77.

- (60) J. Barnes, *ibid.*, p. 77.
- (61) M. Burnyeat, *ibid.*, p. 97, p. 138-9.
- (62) J. Barnes, Aristotle's, Theory of Demonstration, p. 85, *Aristotle's Posterior Analytics*, p. xix.
- (63) E. Berti, *ibid.*, p. 108.
- (64) 『人間の知識』『ラッセル著作集 第9巻』p. 64 鎮目訳 (みすず書房 1960)
- (65) 拙稿「アリストテレスの目的論的然観 I, II」『北海道大学文学部紀要』No. 79 pp. 146-169, No. 80 pp. 115-131 1994